

# 北大闘争の位置と思想

The Positioning and Ideology of the Hokkaido University Struggle

## 河西英通

KAWANISHI Hidemichi

はじめに

- ①戦後北大史を歩く
  - ②1960年代の北大と堀内学長の誕生
  - ③闘争の時代
  - ④遅れて来た〈革命〉?
  - ⑤大学立法とバリケード封鎖
  - ⑥封鎖解除の果てに
  - ⑦「造反」の名のもとに
  - ⑧大学民主化と大学解体論
- むすび

### 【論文要旨】

1960年代後半の北海道大学の事態(北大闘争)は、戦後民主化闘争の流れと、ベトナム反戦運動や大学が抱えていた諸矛盾、さらには党派間の対立がぶつかり合うなかで生じた。本論は学内に大量に散布されたビラや当該期の学長の関係文書を中心に、学生新聞の紙面も追跡しながら、学生教職員の心情にまで踏み込んだ分析を試み、北大闘争の普遍性・個性そして個人性の解明をめざした。

北大闘争は周回遅れの大学闘争に見えたが、戦後の大学民主化においては1947年に全国に向けて大学制度改革案を発表するなど先駆的役割を果たしていた。大学をあげて取り組んだ1950年のイーゼル闘争も知られている。大学民主化運動は60年代後半の北大闘争の渦中でも、栄えある「革新」史として回顧された。しかし一方で、他大学と同様に反戦運動、寮自治、軍事研究などが問題化していた。こうした大学民主化の伝統と1950年代半ばから60年代半ばに蓄積された大学の諸矛盾解決の焦点として、1967年に「革新学長」が誕生する。以後、北大闘争は①「革新学長」を先頭とし、学生自治会や教職員組合が推し進める大学民主化路線と、②それに批判的で大学そのものの存在意味を問うクラス反戦連合や全共闘、新左翼の大学解体路線が対抗し、③その間に解放大学運動などを通じて大学の内実を大幅に変革しようとする「造反」教員が位置するという構図をとる。

北大闘争のピークは1968年ではなく1969年であり、①～③のアクターは激烈な対立を見せつつ、それぞれの内部にも複雑な構造をはらんでいく。①には強固な革命思想や暴力志向、②には反マルクス主義的傾向やロマンチズム、③には敗北主義・諦念主義が見られた。

北大闘争とは、戦後民主化の系譜に立つ北大民主化運動が60年代から70年代にかけての政治状況と大学の大量化のなかで展開しきれず、大学という存在が地域社会における絶大な知的権威にとどまることで、社会変革の主体として形成されなかった歴史である。

【キーワード】 北大闘争, 大学民主化, 革新学長, クラス反戦連合, 全共闘

## はじめに

1960年代末から1970年代初めにかけての大学闘争<sup>(1)</sup>の研究を概観すると、これまで北大闘争はほとんど対象化されてこなかった。東京や関西を中心に記録・記憶・研究が再生産される陰で、〈周辺〉大学の姿としておぼろげに見え隠れしたに過ぎない。基本的な文献は『北大百年史』部局史（1980年）・通説（1982年）および『北大百二十五年史』通説編（2003年）である。

しかし、闘争後40年経った頃から、北大闘争に関する発言が出始めてきた。2009年には現役北大生が論文<sup>(2)</sup>を発表し、北海道大学史研究会が「北大紛争1969-1970」映像資料上映会<sup>(3)</sup>を開催した。2011年には『蒼空に梢つらねて：イールズ闘争六〇周年・安保闘争五〇周年の年に北大の自由・自治の歴史を考える』<sup>(4)</sup>が刊行され、当時教職員組合工学部班で封鎖阻止行動委員会の責任者だった今野平支郎氏の「『大学紛争』にかかわって」が北大闘争の実態をリアルに描いている。

同書には手島繁一氏の「大学民主化闘争と「紛争」—「一九六八年論」を手がかりに」も収められている。手島氏は当時北大学生自治会連合（学連）委員長でのち全日本学生自治会総連合（全学連、民青〔日本民主青年同盟〕系）委員長もつとめた。手島論文は北大闘争論ではなく、一般的な大学闘争論にとどまるが、注目すべきは全共闘中心に時代描写することを一面的と批判する一方、全共闘運動に「歴史的な理解」を持つようになったと述べている点である。さらに「自己否定」の言説は全共闘に批判的な手島氏たちも含めて、「多くの学生を虜にするマジックワード」であったと告白したうえで、1972年の連合赤軍事件はそうした否定の連鎖・連続の結果だったと総括し、「否定し合う関係でない関係、お互いを認め合う関係」をどう作っていくのかという今日の問題を提示している。

手島氏の告白は衝撃的であるが、北大闘争を含む当時の大学闘争を再検討する際、固定的な捉え方から離れ、対立する勢力間の関係性を考える一つの視点になりうると思う。

本論の目的は、①北大闘争の経緯をピラやパンフレットを素材にして、なるべく丹念に跡付ける事であり、②北大闘争における諸勢力間の関係性を多角的に描写する事であり、③周回遅れのイメージされている北辺の大学闘争の独自性（ないし限界性）を探る事である。主要な資料は筆者が保管している「北田英人資料」（約600点、北田英人氏は文学部・自治会系）であり、補助的に北海道大学大学文書館所蔵の「高野博三資料」（全530点、高野博三氏は工学部・ベ平連系）を用いた。そのほか、当時の学長堀内壽郎氏の関係資料、同文書館所蔵の「堀内壽郎関係資料」と新聞・雑誌記事などを利用した。ピラ・パンフレットのタイトルと引用文の混同を防ぐため、ピラのタイトルは[ ]、パンフ類のタイトルは『 』で括り、出典表記は煩瑣を避けるため、北田資料にはK、高野資料にはTと付した。堀内資料には文と付した（発行年月日は判明の限り）。資料に見られる「斗」の字はすべて「闘」に直し、敬称は略した。

## ①……………戦後北大史を歩く

### (1) 改革派堀内壽郎の登場

敗戦後、大学改革の動きが起こる<sup>(6)</sup>。北海道帝国大学（1947年10月1日付勅令により北海道大学）では1947年3月に伊藤誠哉総長（1949年5月公布「国立学校設置法」により学長）を会長とする北海道帝国大学大学制度審議会が発足し、堀内壽郎教授・松浦一教授らの理学部原案を基礎に大学制度改革案を策定した。改革案は学内および全国の関係機関に配布されたが、独立・連合大学院構想や教員の定期資格審査など、全学的な合意を得られない点もあつた<sup>(7)</sup>。全国に広く配布されたのは、大学制度改革案が北大に限られるものではなかったからである。堀内は戦前に日本学士院の恩賜賞を受賞した学究肌だったが、理学部内に「大学のあり方研究会」を結成し、GHQ科学顧問ハリリー・ケリーの来日を機に設けられた科学渉外連絡会に改革論議を働きかけていた。松浦が参加した連絡会総会が大学改革の原案作成を北大に託したことで、上記の改革案が生まれた<sup>(8)</sup>。

堀内は48年に触媒研究所（現・触媒科学研究所）の所長となり、民主主義科学者協会（民科）札幌支部にも加入し、49年の北海道大学新聞（以下、北大新聞と略す）10月15日付は堀内を「学問に持つ自信と迫力 学内民主団体のホープ」と報じている。レッドパージの対象にもなるが<sup>(9)</sup>、大学紛争期まで学内改革派の旗手として先頭に立ち続ける<sup>(10)</sup>。

### (2) イールズ闘争と白鳥事件

1950年代の北大史で特筆すべき出来事は、第一に50年5月のイールズ闘争である。GHQ民間情報局教育顧問ウォルター・イールズは前年49年7月の新潟大学開校式以降、全国の大学を回り反共演説を行っていた。北大来学直前の東北大学では学生たちの猛反発を受けている<sup>(11)</sup>。5月15・16日のイールズ講演会・懇談会は学生たちの激しい抗議で大混乱に陥り、翌6月に関係学生処分、7月に「北海道大学学生生徒団体に関する内規」制定、共産党北大細胞の公認取消という事態を招く<sup>(12)</sup>。ただし伊藤学長が公然とイールズに不同意を表明したことは、高く評価されている<sup>(13)</sup>。

第二は52年1月に起こった札幌市警警部暗殺事件、いわゆる「白鳥事件」である。当時は共産党分裂時代で、武装闘争路線のもと、多くの学生党员が山村工作隊や中核自衛隊に動員され、軍事行動に参加した。白鳥事件にも少なくない北大生が巻き込まれ、のち中国へ逃亡したものもいる。事件に関与した疑いで前職組委員長・農学部講師太田嘉四夫も不当逮捕された<sup>(14)</sup>。

### (3) 杉野目時代と60年安保闘争

1950年代後半から1960年代後半まで、全国的な大学拡大政策のもと、北大も拡張期に入る。その波頭に立ったのが50年から理学部長となり、54年から66年まで学長を務めた杉野目晴貞である。杉野目は64年から66年にかけて国立大学協会（国大協）の副会長でもあつた。この時期に後述する新寮闘争、軍事研究反対闘争などが起こるが、それより先58年には警職法改正反対闘争、59年から60年にかけて日米安保条約改定阻止闘争が起こる。その象徴的人物として唐牛健太郎がいる。唐牛は北大教養部学生自治会委員長・北大学連（50年11月発足）中央委員会委員長・北海道学生自

治会連合（道学連）委員長を経て、共産主義者同盟（ブント）書記長の島成郎の説得により、59年6月の全学連第14回定期大会で委員長に就任する。それまで全学連委員長はほとんど東大・京大出身者だったので、唐牛の選出は異例だった。

60年安保闘争の前後、北大の学生運動も自治会の再建・結成などを基盤に活発になる。57年10月には反戦学生同盟支部が結成され（反戦学同自体の結成は51年12月）、58年6月に社会主義学生同盟（社学同）支部と改称する。社学同はブントの学生組織となる。59年5月には安保改定阻止・大学自治擁護全北大共闘会議（北大共闘、職組・学連・寮連・院協・生協・生協労組などで構成）が結成され、学内民主勢力を糾合することとなる。当初、社学同も入っていた<sup>(15)</sup>。『恵迪〔迪〕寮史』第2巻（恵迪寮寮史編纂委員会、1987年。寮問題に関しては、同書を参考にした点が多い）によれば、59年9月に社学同の寮生が恵迪寮を「学生運動のメッカ」にするという噂が流れている（596頁）。また、共産党員の唐牛が離党してブントに加盟したことで、安保闘争を通して共産党とブントは敵対し、結果的に「北大共産党細胞は「たった七人」になっていた」という<sup>(16)</sup>。

## ②……………1960年代の北大と堀内学長の誕生

### (1) 大学問題の噴出

1960年代の大学にとって一大争点は寮問題であり、北大も例外ではなかった<sup>(17)</sup>。国立大学の学寮について、62年7月に学徒厚生審議会答申「大学における学寮の管理運営の改善とその整備目標について」が出され、それに基づき、64年2月に文部省は「学寮における経費の負担区分について」を通告し、学生負担の強化に出た。これに対して、同年11月に全日本学生寮自治会連合（全寮連、同年6月再建）が中央総決起集会を開き、負担区分通告・学寮管理規定案撤回を文部省に申入れる。同年12月には共産党系の全学連が再建（平民学連の発展的改組）される。『北大評論』第9号（北海道大学雑誌刊行会、1964年、はじめ『雄叫び』と題す、K）は巻頭言「全学連の再建にあたって」で祝意を表明し、特集「学生の生活と権利をめぐって」を組んで、①学寮問題、②サークル活動、③医学部インターン問題をとりあげた。

北大では64年に新寮建築にともなう管理運営問題が浮上し、学生負担増加、自治権剥奪などの攻撃が始まる。66年6月に新寮規則が制定され、この線で国大協学生問題特別委員会（委員長は京大総長奥田東）委員だった杉野目学長は答申案をまとめ、同年11月の国大協総会における「学生問題に関する所見」となる。学生問題所見は67年9月に学生問題特別委員会編「学生問題に関する資料」となり、全国の国立大学に頒布された。戦後間もなくの大学制度改革案といい、今回の学生問題所見といい、北大が全国の大学運営に及ぼした影響は小さくない。北大寮自治会連合（寮連、55年結成・58年再建）は新寮規則反対闘争に立つ。66年9月から10月にかけて恵迪寮はじめ4寮は新寮規則に抗して、補充入寮の自主銓衡を実施した。67年3月には4寮の寮長が無期停学となり、学生課と寮自治会の並行入銓という事態になる<sup>(18)</sup>。学連・寮連は当局の寮自治攻撃は全国的にも際立った「熾烈さ」であると批判した<sup>(19)</sup>。

また軍事研究反対闘争も起こっている。安保体制打破・大学自治擁護全北大共闘会議編『軍学協

同の現状「米軍資金援助と自衛官入学問題」(1967.10 K)によれば、米陸軍資金が医学部・理学部に、日米科学委員会資金が両学部および農学部・植物園に流れていた。杉野目は日米科学委員会委員(化学担当)であり、日米協会会長でもあった。61年には大学院理学研究科で現職自衛官の委託聴講生受入問題、62年には大学院工学研究科で現職自衛官合格問題が起こり、反対運動が起こった。医学部でも現職自衛官(医師)の研究生受け入れや、附属助産婦学校の婦人自衛官入学問題などがあった。学園外においても、62年に米軍による十勝郡浦幌町「ロランC基地(電波基地)」設置反対運動、自衛隊演習に抗議した千歳郡恵庭町の酪農家が通信線を切断した「恵庭事件」をめぐる自衛隊違憲訴訟支援、64年に道東の自衛隊矢白別演習場設置反対運動に学生たちは参加している。

65年5月には教養部機動隊導入事件が起きている。教養部祭実行委員会と教養部学生委員との交渉がもつれ、学生が座り込みをしたところ、機動隊200名が動員され、学生1名が逮捕された。北大史上初めての機動隊導入だった。学生の抗議運動は高まり、6月の抗議ストライキ・全学総決起集会には約2500名が集り、「杉野目学長の即時退陣」「官憲の学内介入と不当弾圧反対」を決議した。54年から続いた杉野目体制の末期、学内の諸矛盾が一挙に噴出した観がある。

## (2)「革新学長」の誕生

1960年代は「革新学長」誕生への道程でもあった。62年の学長選では杉野目三選阻止に向けて職組の支持を受けた堀内が起ち、絶対優勢と言われたが4票差で敗北した。66年にも杉野目の後継者古市二郎理学部長に対して、堀内が職組の支持を受けて出馬したがわずか1票差で負けた。しかし、古市が急逝したため67年に学長選が行われ、堀内は三度目の立候補で勝った。大学制度改革案から20年後、改革派の学長が誕生したのである。

67年4月22日付北海道新聞(以下、道新と略す)は「にっこり革新学長、なんでも話し合う大学に」の見出しで堀内勝利を報じたが、内情は厳しかった。堀内は杉野目体制脱却のため、直前に北大から千葉大事務局長に転出した事務官に北大復帰・事務局長就任を依頼している<sup>(20)</sup>。あまりにも無茶苦茶な話だったが、堀内は翌年にも、日本の大学がこれ以上「大学という名の就職準備講習会」になってはならない、ぜひ手を貸してもらいたいと同様の依頼をし、ふたたび断られている<sup>(21)</sup>。堀内の危機感は強かった。

学長としての堀内のスタンスを知るうえで、5月8日の学長就任講演「一科学者の成長」が興味深い。仙台の二高出身の堀内は、旧制高校を偲んでこう述べている。

阿刀田〔令造〕先生〔二高校長〕が生徒のお蔭で怒鳴り込まれたことは一度や二度ではありませんが、〔中略〕生徒に限りない愛を注いだ人です。〔中略〕社会通念の教官から生徒への一方交通の教育と、野口〔明、阿刀田の後任〕さんの「あれは生徒に教育されたんだよ」と云う逆の一方交通について述べましたが、この対立を総合させてくれたのも野口さんの言葉であります。旧制高校が廃止になってから野口さんはずくづく述懐しておりました。「納得がいかないと校長をなぐりつけそうな剣幕でつかかってくるが、一旦納得するととことんまで協力する。あんな愉快なことはもうない」と当時を懐しんで居られました。教育することはされることである。〔中略〕それで学長の試験勉強にやっと間に合ったという気がします。阿刀田流でいきます。そして私自身も阿刀田流に大いに成長しましょう。

堀内は北大新聞のインタビューで、「飛び上りの学生が出て責任を負わなければならなくなったから私が責任を負う。そうでなきゃ、教育はあり得ない」「まず信頼だ。そして学生が大学当局に対して自分の行動に責任をとるように指導する。それが僕らの経験から出てきたものだ」とも述べており、国大協内に広がる大学自治の脅威＝学生運動論を批判して、「いまでも、むかしでも〔大学自治の脅威は〕外部の力だ。いま学生が非常識な行動に出るのは、大部分外部の力に負けて大学当局がへこんでしまうことに対する懸念だ。だから学長は、外部の力に屈しないぞという姿勢をとらなくちゃいけない。それで学生との間に信頼関係を打ち立てなければならない」と自説を展開した。

堀内は杉野目時代を批判した。これに関して、学生新聞は「杉野目体制の重要な一角が、今回の学長選で崩れたことは事実であるが、学内に残っている反動勢力の力を過小評価することは、絶対に禁物である」と警告して、教員と学生の対話による学園民主化を唱えた。また前掲『軍学協同の現状』は、「学長の孤立化の策謀、官僚統制の強化、民主団体の会場使用に対する官僚の不当弾圧、職組、学生運動に対する露骨な弾圧、生協に対する新たな負担区分の強要など、官僚とそれに結びついた一部反動教官の策謀は目にあまるものがあるが、基本的には、学内の力関係は学内の民主勢力にとって有利に発展していることを示している」と分析している（17頁）。

堀内体制スタート時の学内状況を堀内の相棒であった学生部長鈴木朝英は、こう吐露していた。「ないしょの話だがね、堀内先生が一番苦労しているのは学生じゃなくて、本当は教官に対してどうやって決意を新たにしているかということなんだろう。しかし、これはまた学生運動よりもっと手ごわいからな。学長が口先だけでいっただけではなかなかだめなんだ。」<sup>(26)</sup>以後、堀内は四方八方から教員の手ごわさに襲われ、学生たちの「納得」は得られず、理想とした阿刀田流の「成長」はきわめて困難となっていく。

### (3) 「紛争」前夜の堀内体制

堀内は懸案の学寮問題を、従来通り学生に実際の運営を任せて収拾をはかる<sup>(27)</sup>。1968年度新入生に向けたメッセージは、「大学教育は教官から学生への一方交通であってはならない〔中略〕教官は学生を鍛えると同時に、教官は学生から鍛えられるという事は、私自身の経験に教えられている。ただし、教官を鍛える学生はstudentの方であって、講義をうのみに速記して試験でそれを吐き出して終りという所謂学生ではない。ここに教官と学生の協力がある。その中から自ずと自主性が生まれて来る。〔中略〕この協力を通じて良い大学を築き上げようではないか」という阿刀田流宣言であった。68年5月の恵迪寮交渉では、「大学自治を守るために首をさしあげてもいい」とまで発言したという<sup>(29)</sup>。

前出『軍学協同の現状』は、12年に及んだ杉野目体制を「文部省下請けの「人事体制」であると同時に「日米科学」の下請けの「科学体制」」（16頁）と総括したが、堀内はいずれの「下請け」からも脱却して、教員と学生の相互協力による自主的な大学づくりをめざそうとした。68年暮には対話の場として「全学協議会」<sup>(30)</sup>の設置を提案している。20年前の48年2月に発足したものの、有名無実化した全学協議会<sup>(31)</sup>の復活であった。

堀内は若き日の大学改革案を捨て去らず、今こそ実行しようとしていた。大学自治の立場から、「いかなる場合も警察権力が学内に入ってくる事は反対」<sup>(32)</sup>と述べていたが、69年1月の東大機動隊

導入に際しては、「現時点ではやむを得ない」と揺らぎ、「日本の大学全体の体質改善」「もっと大学を大切に<sup>(33)</sup>する気持ち」を求めている。一般読者を想定した無難なコメントだが、堀内は大学が直面している危機は個別の対応でどうなるものでもなく、大学総体が取り組まなければならない危機だと認識していた。69年3月に堀内は入試終了後に開かれた受験生向『講演と音楽のつどい』において、「理論物理学や数学は非常に進んでいるが、これはどっちもあまり金がかからない分野だからだ。いまの日本では金のかかる研究は進まない。これは政治の貧困のあらわれ。みなさんが選挙権<sup>(34)</sup>を持ったなら、絶対に政治の貧困や腐敗を助長するような一票を投じてはいけない」と訴え、同月の卒業式の告示でも、「諸君が学んだ大学は理想からほど遠い。なによりもマスプロ教育がいけない。いまの官僚や政治家は、法科万能のマスプロ教育のハシリの時代に大学を卒業した人たちが多い。したがって大学とはそんなものと思っている。まず、そうした考え方を改めてもらわねばならない」と大学問題の所在を指摘した<sup>(35)</sup>。

#### (4) 学生自治会の動向

前述したように1960年代前半の学生運動は必ずしも停滞していたわけではないが、北大新聞67年11月25日付「最近の北大自治会運動を探る」が「学連主流派の危険な安住学生の脱自治会現象目立つ 急務は反戦意識の組織化にあり」と記しているように、民青系主導の学生自治会が「安住」と見なされ、学生の自治会離れと映ったようである。そこに起こったのが羽田事件である<sup>(36)</sup>。

67年10月8日の佐藤首相ベトナム訪問阻止闘争（第一次羽田事件）では京大生が死亡した。ある女子学生は「これからは学生運動が盛んになるのかな」と思ったという<sup>(37)</sup>。11月12日の佐藤首相アメリカ訪問阻止闘争（第二次羽田事件）では300名以上の検挙者が出た。66年以降、北大では教養部自治会選挙や寮連選挙に反戦闘争委員会（日本革命的共産主義者同盟革命的マルクス主義派：革マル派）が「学園民主化」路線反対を主張して立候補していたが、67年11月22日の教養部学生大会で反戦闘争委員会・学生戦線（社会学同）・マルクス主義研究会（革命的共産主義者同盟全国委員会：中核派）共同提案の「破防法適用粉碎」決議が採択され、執行部提案の「暴力分裂集団弾効、破防法反対」決議が否決された<sup>(38)</sup>。

羽田事件の衝撃は大きかった。さらに68年1月には長崎県佐世保で米原子力空母の寄港に反対するエンタープライズ寄港阻止闘争（後述）が起こる。こうした反戦運動の高揚のなか、翌2月に教養部自治会選挙が行われ、副委員長は民青系が勝利したものの、委員長選挙は決戦投票となり、民青系778票、三派系（社会学同・中核派・社会学同〔日本社会主義青年同盟〕解放派）675票という接戦で民青系が辛勝した<sup>(39)</sup>。1回目の得票数と比べると、民青系は665票に100票余を上乗せし、三派系は300票に革マル派の231票を加え、さらに120票ほど上乗せしたことになる。前年秋以来の三派系と革マル派の共闘は「北大教養の民青の支配を根底から揺り動かした」と言われたが、同時に「六七五票が、三派系全学連の闘争支持に直線的に結びつかない」もどかしさが発生し、「組織された実力部隊を支える基礎を、北大教養において構築して行く課題が三派系に負わされている」構図が浮き彫りになった<sup>(41)</sup>。

4月の医学部自治会選挙では社会学同系が民青系に勝ち、5月の教養部自治委員会において民青系指導部への批判が強まる<sup>(42)</sup>。5月の教養部学生集会（学生大会が定足数に満たず流会）では反戦闘争委<sup>(43)</sup>

員会と学生戦線が統一会議を結成して、基調報告案への対案を提出する（否決）。可決されたのは執行部提案の「基調報告案」「三派・革マルの分裂主義者弾劾」と反執行部派提案の「議長団の非民主的運営弾劾」だった。<sup>(44)</sup>複雑な様相を見せながら、反民青系は共闘した。

しかし、こうした共闘関係は以後見られなくなる。同年7月に三派系全学連が中核派全学連と解放派（反帝）全学連に分裂したからである。学生の支持は三派系から離れた。同年10月の教養部自治会選挙は民青系が圧勝し、三派系にかわり革マル派が二番手、以下、自治会刷新会議派（良識派・右派）、<sup>(45)</sup>解放派、構改派（民主主義学生同盟、1967年2月北大支部結成）、中核派の順となる。社学同の立候補は確認できない。

### ③……………闘争の時代—ベトナム反戦と北大—

#### (1) エンブラ闘争

1960年代後半、ベトナム戦争は多くの学生の関心呼んだ。北大では66年10月19日付で北大労働問題研究会が「ベトナム戦争と10・21スト」Kを出しているのが早い例だが、ベトナム反戦ムードは68年1月のエンタープライズ寄港阻止闘争（エンブラ闘争）で一挙に高まる。学連は「米原子力艦船の佐世保入港を許すな！」Kのビラを配り、教養部自治会はエンタープライズ「寄港」反対全学集会を開いている。文学部では「討議資料 エンタープライズ米原子力艦船入港を許すな！」Kを作成し、ベトナム問題ティーチインを開いている。またエンタープライズ入港直後、1月23日には米海軍の情報収集艦プエブロ号が朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）領海を侵犯し、拿捕されるという事件（プエブロ号事件）が起きた。文学部自治会は「朝鮮問題一挙に緊迫 プエブロ号によるアメリカの軍事挑発に抗議しよう！」Kを出している。

一方、反戦闘争委員会も「1.17, 1.18 エンタープライズ阻止闘争に起て！」K・「1.18 エンタープライズ寄港阻止闘争に決起せよ！」K、学生戦線も「日帝のベトナム侵略と核武装への道 エンタープライズ寄港実力阻止！」Kのビラを出し、学生に決起を呼びかけた。

一年後、北大新聞は「68年は、北大においても、エンブラ闘争で始った。我々は、その時、この北辺の地<sup>(46)</sup>にあって、政治の季節がめぐってきたのを知った」と振り返っている。

#### (2) 反戦運動の展開

状況は明らかに変化しつつあった。新年度が始まった1968年4月26日、全国で国際反戦統一行動が行われるが、札幌でもベ平連（後述）、反戦闘争委員会、反帝学評、マル研、学生戦線ら各派合わせて450名が市中デモを敢行し、ヘルメット部隊も登場した。<sup>(47)</sup>

学連系も「北大を真理と民主主義の砦に!!」Kを出し、5月23日の全道学生統一行動、6月1日からの第10回北大祭に向けて訴えた。北大祭パンフレットKは「見つめよう真実を 担おう未来を」をスローガンに、「ベトナムに飛びたつ侵略機 高まる軍国主義復活の足おと 世界の友と呼びかわし 祖国に平和と民主主義を 今こそ、心を、行動を一つに 学園のすみずみから学問文化のたかなりを一明るく豊かな学園建設をめざして—」と訴えている。6月22日には安保破棄要求全

北大・全札幌大学人集会在開かれて<sup>(48)</sup>いる。

並行して長沼ミサイル基地問題が起こった。5月に防衛庁（当時）は航空自衛隊の地対空ミサイル基地を夕張郡長沼町に設置する旨を発表した。6月25日には長沼・千歳ミサイル基地設置阻止全道学生闘争委員会（基地闘委）北大共闘が北大反戦青年委員会（学生戦線・反帝学評・マルクス主義研究会・民学同）によって結成され、<sup>(49)</sup>同30日に現地闘争が行われる。学生戦線は「長沼を第二の成田に転化せよ!!」とアピールした。<sup>(50)</sup>9月15日には反戦・反安保長沼ミサイル基地設置阻止全道青年集会在開かれ、全道反戦を中心とする労働者約400名と北大の反戦闘争委員会・クラス反戦連絡会議・ベ平連や北海道教育大学札幌分校（現・札幌校）・小樽商科大学などの反日共系学生ら550名が参加した。<sup>(51)</sup>

### (3) ベ平連の結成

高まる反戦運動の中で登場したのが、ベ平連とクラス反戦である。ベ平連の中心人物は、北大教員でのに「造反」する哲学者花崎皋平である。<sup>(52)</sup>花崎とベ平連を介在したのはいいだ・もも（飯田桃）と思われる。両者は1950年代からの知り合いだった。ベ平連について、花崎は『風の吹きわけの道を歩いて一現代社会運動史私史』（大月書店、2008年）の中で次のようにまとめている。①札幌ベ平連の立ち上げは、66年6月2日にすすきの東本願寺で開かれたハワード・ジン（ボストン大学）と小田実の講演会（全国縦断講演旅行の初回）だった。②講演会開催を依頼されたのは、花崎と北大法学部のM（松沢弘陽カ）である。③札幌ベ平連の活動スタイルは東京を真似て、講演会やデモだった。④結成当初の参加者は少なく、学生は酪農学園大学以外見られなかった。⑤「札幌生まれの中産階級に属する若者はほとんどゼロ」で、貧困家庭の若者たちが中心を担っていた。

『ベ平連ニュース』や立教大学共生社会研究センター所蔵ベ平連関係資料をもとに、66年から68年の札幌地域のベ平連の動きを追うと、上記講演会があった66年6月2日、小田実らは北大平和問題談話会の松沢弘陽や花田圭介（文学部）らと面会し、その後北大および東本願寺で講演会を開いた。講師は小田、ジンおよびラルフ・フェザーストン（学生非暴力調整委員会）である。参加者からは中国の核実験、ピートニクと平和運動についての質問が出ている。参加したある北大生は「痛快な思いがした」「私は、多くの市民がこれ〔ベ平連〕に参加するよう訴えていくつもりです」と述べている。<sup>(54)</sup>

札幌ベ平連および北大ベ平連の正式結成は同年11月である。同年12月8日に札幌市民会館でいいだ・もも、吉原公一郎らの講演会が開かれているが、参加者は80名ほどだった。わずか7名でデモをしたこともあり、「デモではなくチンドン屋だ」<sup>(55)</sup>と言われ、高野斗志美を中心とする旭川ベ平連の方が活発だった。67年5月26日には札幌ベ平連主催の「ベトナムを考える夕べ」が開かれているが、参加者に「学生が少なかった」<sup>(56)</sup>。6月のデモも北大生を中心に30名ほどでしかなかった。

札幌ベ平連の活動が大きく転換するのは、68年6月の「ベトナム反戦全国行動月間」、いわゆる「六月行動月間」である。北大では南ベトナム解放絵画展、ベトナム反戦・一週間連続学内デモ、ベトナム反戦・北大対話集会在もたれ、15日の北大統一行動には約500名が参加し、市中デモを行った。8月18日にはクラーク会館大講堂で国際反戦会議札幌集会在が300名を集めて開催され、札幌ベ平連は社学同、反帝学評、北大新聞会などと<sup>(57)</sup>ともに参加している。

ベ平連は組織拡大をとげ、前掲ベ平連関係資料の「68年6月行動 各地からの手紙」<sup>(58)</sup>によれば、「北大六月行動実行委員会」は教養部クラス反戦、サークル反戦、安保問題研究会、社会問題研究会、護憲反安保学生会議、統一会議、反戦闘争委員会、反帝学生評議会、ベ平連、マルクス主義研究会、学生戦線から構成された。

学連は北大六月行動実行委員会が「分裂主義者に策動攪乱の場を提供」していると批判したが、<sup>(59)</sup>ベ平連自体は同時期開催の第10回北大祭にも参加している。<sup>(60)</sup>この時点では学連とベ平連は決定的な対立関係にはない。なお、北大をはじめとする北海道ベ平連は東京や京都のベ平連に批判的だった。8月中旬に京都で開催された「反戦と変革に関する国際会議」に対して、「官僚的、非民主的及び知識人のお遊び的」会議と酷評し、中央と地方のギャップを指摘している。<sup>(61)</sup>

#### (4) クラス反戦の誕生

前述のごとく北大六月行動実行委員会の主要構成団体は教養部クラス反戦（以下、クラス反戦と略す）だった。北大闘争の本格化は69年4月の入学式以降だが、理解を助けるために、68年から69年にかけて北大新聞記事と北大本部封鎖学生の公判記録『11・8裁判闘争記録Ⅱ 本部決死隊公判冒頭陳述集』（公判闘争記録刊行委員会、1971年、T）をもとに、クラス反戦の動きを整理しておく。

第一：67年10月8日の羽田事件に影響を受けてクラス反戦は誕生した。

第二：68年4月26日の国際反戦デーにクラス反戦はベ平連と共同行動をとる。

第三：68年6月13日にクラス反戦連絡会議（準）が結成され、同15日に約200名によるクラス反戦統一行動が行われた。「今や北大に新しい怪物が登場しつつある。クラス反戦という怪物が」と書かれたビラが撒かれ、「ありとあらゆる既成党派が、このクラス反戦の動向に神経をとがらせ、これにどのように対応していくのかが、北大での運動の、一つの歓迎せざる任務となった」<sup>(63)</sup>。

第四：背景として、セクト間のゲバルトが「学生大衆の活動家群への不可解な感情」を産んだ事情があり、「諸セクトの勢力きつ抗に基くクラス反戦結成」「ノンセクト・ラディカルの萌芽」につながった。自治会選挙の閉塞状況も手伝っている。

第五：68年9月13日にクラス反戦大集会が開催され、クラス反戦連絡会議が発足する。組織原則は、①個人の主体性を保障する、②連絡会議は各クラス反戦の連合体とする、③決議方法は圧倒的多数による合意とし、構成員の3分の2以上で決議する、④各クラス反戦および各個人は決議に拘束されないとされ、次の5点が闘争課題だった。「アメリカのベトナム侵略戦争反対」「日本政府の侵略加担反対」「長沼ミサイル基地設置阻止」「沖縄の核基地付返還策動粉碎」「七〇年安保粉碎」。

第六：クラス反戦の転機は、68年9月15日の長沼現地闘争である。4月から6月にかけてのベトナム反戦運動は「即時的な反戦意識」に依拠したが、長沼闘争は「七〇年安保粉碎闘争とはっきり結合する反帝闘争」だった。クラス反戦の「先進部分」は街頭主義に走り、残された本隊は引き回され、「デモ動員機関」化した。

第七：結局、クラス反戦は巾広イズムの運動体から活動家集団に変質し、「闘う部分」と「闘わざ

る部分」へ二分化する。その結末が68年の10・21闘争であり、500名以上が結集したにもかかわらず、運動は「崩壊」「ほぼ完全に解体」した。

第八：69年にかけて、セクトの指導性が脆弱化する中で「北海道学生運動の質的転換」が生じ、クラス反戦連絡会議はクラス反戦連合に向かう。

## ④……………遅れて来た〈革命〉？

### (1) 1968年度を送る

1969年1月18・19日の東大安田講堂攻防戦は北大の学生にも大きな衝撃をあたえた。19日には北海道労学集会が120名の参加で開催され、21日昼にクラス反戦有志ら70名が「東大闘争勝利・全共闘支持・全国学園闘争勝利」をスローガンに集会を開き、雪深いキャンパスをデモ行進した。「既成の諸党派の呼びかけのないまま無党派の学友が独自に提起しヘルメットをかぶった」出来事であり、同日夕方には学連系学生140名による東大闘争勝利・全国学園闘争勝利集会も開催され、革マル系と衝突した。学連系に負傷者が<sup>(65)</sup>出ている。

2月4日にはB52撤去などを求める沖縄統一行動に呼応して、教養部校舎前で400名の集会がもたれる。ベ平連と2・4闘争実行委（革マル系）の主催で、社学同、中核派、フロント、農学部・法学部・経済学部各学部反戦およびクラス反戦が集まり、集会後は高校生も加わり、最大600名でアメリカ領事館や自民党道連に向けて市中デモを行った。<sup>(66)</sup>同日は全道青年学生総決起集会も開かれ、民青の呼びかけピラ<sup>(68)</sup>によれば、中心スローガンは「安保条約廃棄」「沖縄の全面返還」「千歳・長沼ミサイル基地化反対」「春闘勝利」「東大闘争勝利」であった。

学生自治会の動きを見ると、2月7日の教養部自治会選挙で委員長選挙は民青系がダブルスコアで圧勝しているが、革マル派の支持が着実に増えている点が注目される。副委員長選挙では民青系（当選）の票数に革マル派と中核派の合計票は肉薄した。<sup>(69)</sup>この勢力接近が6月の教養部学生大会における民青系執行部のリコールにつながると思われる（後述）。また薬学部自治会では民青系全学連および北大学連への加盟が圧倒的多数で否決されている。<sup>(70)</sup>自治会の民青優位状況は崩れ始めていた。

このような中、大学自治に関する重大問題が起こる。教育学部改革に対する文部省の弾圧である。<sup>(71)</sup>教育学部は同年1月に「北海道大学教育学部運営協議会内規」を定め、全構成員自治を唱え、学部長選挙をオープン化し、助手差別の撤廃などを進めた。堀内学長の支持も受け、学生参加による初めての学部長選挙が2月に行われたが、選出された学部長の発令を文部省はその後2年延引した。この問題は九州大学学長事務取扱問題とともに全国的に注目され、教育学者・法学者らは「北大教育学部長・九大学長取扱未発令問題における文部省の直接介入に反対する声明」を出し、国会も取り上げた。教育学部からは抗議の声があがり、<sup>(73)</sup>新聞報道もされることで、<sup>(74)</sup>広く市民の関心を呼んだ。

4月14日には北大共闘主催「全北大討論集会」が開かれ、学長は教育学部長未発令問題に関して文部省への対決姿勢を明らかにしている。<sup>(75)</sup>同日には発起人32名の「大学の自治についての大学人の声明—北海道大学教育学部長発令問題について—」も発表された。留意すべき点は、直前の4月10日に入学式会場封鎖事件が起こり、学内状況は急速に険悪化していく中、討論集会で最重要視さ

れたのは入学式事件ではなく、教育学部の民主化をめぐる文部省との闘いであったことである。しかし以後、北大闘争の中心課題は対文部省闘争から学内闘争へと急旋回を見せて行く。

## (2) 1969年4月10日入学式

新年度に入り、4月6日には学連系が中教審答申粉碎・「大管法」制定阻止・学園民主化・安保放棄・沖縄全面返還・学生生活擁護・統一戦線促進全道統一行動を行うが<sup>(76)</sup>、反帝学評・革マル派・中核派・クラス反戦連合その他200名も市中をデモした<sup>(77)</sup>。その数日後の4月10日、突発的に入学式場の体育館がクラス反戦・学部反戦の学生40名によって封鎖される。封鎖自体は数時間で解除されたが、入学式は分散実施となった。また会場付近では反戦会議(中核派)・学生戦線(社学同)・反戦反安保行動委員会(反帝学評)ら150名が集結して、入学式弾劾・自主入学式を訴えた<sup>(78)</sup>。新聞は「朝のハプニング」と報じ、東京から付き添ってきたある母親の「北大だけは静かに勉強できると思っていたのですが……」との声を載せている<sup>(79)</sup>。紛争とは縁遠いと思われていた。前月に行われた入試も卒業式も平穏だったから<sup>(80)</sup>、多くの大学人にとっても予期せぬことだった。北大新聞は「学生叛乱の噴出は北大進歩主義の幻想がそれ〔叛乱〕を押えてきた」結果だと分析し<sup>(81)</sup>、1年後には「過去に於ける民青、革マル派が主流であった状況の下、低迷を続けたノンセクト、旧三派系各派の運動の新生であった」と評している<sup>(82)</sup>。

入学式妨害に対し、11日に教養部自治会執行委員会は暴力学生糾弾全北大人集会の開催を呼びかけ<sup>(83)</sup>、教職員組合も糾弾声明を出した<sup>(84)</sup>。堀内学長は評議会の議を経ず14日に学長告示「全学に訴える」を出し、「暴力学生の行動」「大学破壊の暴挙」を指弾した<sup>(85)</sup>。従来、学長告示が学生を「ナチ御用暴力学生」と見なしたことが、学生たちの反感を呼んだと理解されているが、注目すべき点はそれだけではない。「学者、研究者といわれる人々の中にも大学改革によって厳しい学問の世界が出現するのを嫌って、手段として暴力学生を「支持する」者も現われるであろう」「十九世紀の始めからドイツの大学に確立されていた学習の自由が生み出す学問の世界の厳しさを嫌った所謂学者の団が、優れた外国人並びにユダヤ系学者を追放して厳しさを骨抜きにすべくナチと結託して暴力学生を走狗としていた史実を想起させる」と見えるように、学問の厳しさにたじろぐ教員への批判が見られた点である。②- (2) でふれた堀内の教員に対する改革姿勢を想起させる。

堀内学長は4月26日に学生のバリケード封鎖を未然に防ぐために「教職員へ告ぐ」を、5月2日には五派連合(後述)に乱入された評議会が「理性」による解決を訴える公示を出す<sup>(86)</sup>。この間の4月28日の沖縄デーには中核派・社学同・反帝学評・クラス反戦連合と自治会系学生が衝突するが<sup>(87)</sup>、建物封鎖などには至らなかった。同日夕方、堀内学長は教員に向けて「みなさんの努力で、起こりうる流血の惨事と警官の立ち入り、さらにその先にある大学自治の破壊を未然に防ぐことが出来た」と謝意を表している<sup>(88)</sup>。

新入生に対して、多くの呼びかけがなされた。ベ平連「沖縄←反戦→安保を主体化せよ! 全新生の諸君に学生ベ平連より連帯のアピールを送る!」K、反戦反安保行動委員会「官制入学式を拒否し、中教審・国大協路線を粉碎せよ!」K・「新入生諸君に訴える!」K、学生戦線「大学当局による欺瞞的な入学式弾劾! 堀内体制を糾弾し新たな学園闘争を構築せよ!」T、クラス反戦連合「我々は、何故、あのように入学式を闘ったのか!」Tといったビラが配布されたが、中でもク

ラス反戦連合は受験戦争をくぐり抜けた新入生へ熱いエールを送っている。<sup>(90)</sup>

思い起こしてみたまえ、あの受験体制下の三年間を!! 同じクラスの友を、敵とし、にくしみあわされ、連帯をたちきられた、高校生活を! その苦しみを、きれいごとで飾りたてた一片の学長告示で、反古にさせることはできない。三年間の空白を分ちあった友との連帯を回復する意味で。現代資本制社会の、あのウツクシイ本質を透視し、それと対決してゆくことによってしか、それはまた、成し得ないのだ。

高校紛争との連帯も感じさせるが、「デモ動員機関」としてカンパニア闘争にとどまるのではなく、「武装」闘争への飛躍に直面していることも告白している。その武装とは「あの同じ入学式闘争を闘いながら、カンパニア闘争の域をのり越えることができなかった諸君が武装した（カンパニア武装?）とは、明確に一線を画さなければならない」とセクトの動きとは峻別された。クラス反戦連合におけるノンセクト主義は一貫している。

しかし、新入生たちのセンスはクラス反戦連合の地平のさらに先を行くものだった。北大新聞主催の新入生座談会で浪人運動経験者は次のように述べている。<sup>(91)</sup>「大学の矛盾というものは、大学内でしか拒否できないものじゃないかな」「大学への何らかの理想などというイメージは出てこない」「体制の中核としての大学を否定し更に体制をも否定するという意識がはっきりしてきた」「北大を第二、第三の東大へ!」「学生参加幻想を打ちやぶる」「内側から帝国主義大学を破壊するのが効果的ではないかと思う。むろん、破壊したあとに、新しいものを作ろうとしている」。

このような新入生らしからぬ声を受けて、編集部は「68年から69年にかけての全国的学園闘争において獲得された質を、鋭敏に受けとめて何らかの形ですでに主体化し、新たな次元からの発想法を持つ新入生たち。学生運動における世代的進展＝微妙な世代感覚のずれをひしひしと感じ」と感想を述べ、「大学否定、帝国主義大学解体という言葉が彼らの口から飛び出してくる。二年前、いや一年前の新入生にさえ考えられなかったことだろう」と驚きを隠さない。主体としての学生たちは急速に変容しつつあった。

さらに現役浪人生は次のように教育問題総体に関する批判理念まで提起していた。<sup>(92)</sup>

我々浪人が日々受けている苦痛は、けっして浪人であると言う特殊性のみに原因するのではなく、現在の教育体系そのものから来る所の、苦痛ではないのか、それならば我々道浪連は現在の疎外された受験競争を通じた感性の抑圧、人間の分断競争に対して、怒りの団結を浪人自らの手により築き、停止させて来た思考を、主体性を回復し、普遍的人間性を追求し真の人間解放をめざした闘いを押し進めて行かなくてはならないと考える

一方、入学式直後の発行日付を持つ『北大祭ニュース』第1号の「学園民主化、安保を中心に基本方針決まる」は、次の3点をあげている。<sup>(93)</sup>

- 一、私たち学生の学問研究・文化・スポーツ活動をはじめとした要求を結集し日常の活動の成果をもちより、全学の中で深め合い、さらに創造的に発展させる。
- 二、私たちのおかれていた状況や要求をとらえ、教官、院生などと協力して、大学を真に学問研究、文化活動ができる平和と民主主義のとりでにしていくために学園民主化闘争と結合した北大祭にしていこう。

- 三、日本の将来にとって非常に重要である安保・沖縄の問題を北大祭の中で考え、七〇年に安

保条約を破棄する力—統一戦線を北大に作っていかう。

毎年6月が北大祭だったが、こうした基本方針と上記新入生たちの想いとの間には、大学像をめぐるギャップが感じられる。<sup>(94)</sup>

### (3) クラス反戦からクラス反戦連合へ、さらに全共闘へ

4月10日の入学式事件直後、北大新聞は「何故にクラス反戦がこの闘争を行わざるをえなかったのか、それも単独で行わなければならなかったのか」と問題提起している。<sup>(95)</sup> その答えは、クラス反戦がより「大衆的な共闘組織」を創出する必要があったためであり、裏返せば、「現在の北大のあらゆる既成党派の大衆組織が単なる党派フラクション、あるいはそれと変わらないものとなっている」からだ。②-(4)で指摘した教養部学生と党派との関係性という問題である。さらに続ける。「党派の無方針の中でクラス反戦の先進部分は、自らが自らを、闘う共闘組織から強固な大衆的統一戦線へ高めている展望と、明確な方針がないまま四・一〇に突入したのである」。すでに1968年後半にクラス反戦はセクトの軛から離れ、「ノンセクト・ラディカルの萌芽」状態に入っていたが、入学式直前に〈臨界点〉を迎え、いわば〈前に逃げた〉。入学式闘争を機に、「「安保・沖繩・学園闘争」という、以前にくらべてより体系的で、的を日本の支配権力にしぼった運動体」<sup>(96)</sup>＝クラス反戦連合へと一挙にラジカル化させた。北大における実質的な〈全共闘化〉である。

この点はクラス反戦連合自身が語っている。「全共闘M〔運動〕とは、全共闘を名乗って党派が野合することではなく、このような闘いの質を大衆Mの中で創り上げていく過程そのものである」<sup>(97)</sup>。北大新聞も「全共闘とは徹底的な党派闘争を抜きにして、語ってはならない。大衆の闘う質を向上させるのと並行して、党派闘争が大衆次元でなされていかねばならないであろう。安易な、よせ集めの全共闘は、闘う組織として存在しないであろう」と全共闘の〈大衆的〉な創出を訴えた。<sup>(98)</sup> 全国的にはこの年9月に全国全共闘連合が結成されるが、その実態は「八派連合」と称されるセクト連合であった。

前掲『11・8裁判闘争記録Ⅱ』（11頁）によれば、クラス反戦連合の結成アピールはこうである。「①この運動は、クラス（日常的な場）を基盤とした、既成の自治会運動のワクを越え出た、闘う者の自由な結集体であること。②そして、そのようなクラス大衆組織をセクト的に分断、放置することなく、極めて広汎な形で、各々のクラス大衆組織＝クラス反戦を包括してゆくこと。」まごうかたなき全共闘運動である。提案された組織機構を見ると、基礎単位は各クラス反戦であり、各クラス反戦は「①安保・沖繩・学園闘争を担ってゆこうとするものの自由な結集体である。②恒常的に構成員の相互討論を保証し、クラスへの問題提起と方針提起を行ってゆく」とされた。構成員全員の自由参加によるクラス反戦連合大集会が決議機関だったが、決議は「各クラス反戦、各個人を最終的に束縛するものではない」。クラス反戦連合事務局と代表者会議も置かれ、事務局は書記・救済・情宣・会計・組織の各係で編成され、代表者会議は決議権をもつ各クラス代表から構成されるが、発言権は全構成員に認められた。

組織論的にいえば、クラス反戦連合にどれほどの組織性および恒常性があったかという問題が当然浮上するが、ここで注目すべきは「誓約集団」としての性格が付与されていたことである。それは「労働運動における反戦青年委員会、市民運動におけるベ平連その他の運動体、学生運動におけ

る全共闘型諸集団」と同様の原則であり、「革新運動の原点復帰」を意味した。「学生生活において、丸がかえ自治会組織や既成政党に系列化されたタテ割り受益組織の観を呈してきている民青に反逆して登場したクラス反戦連合のような自発的結社において、基本人権の意識は他にまさって養われる可能性があった」と評価されている。この時代に見られた全員加盟制自治会批判であり、共産党系の民青は「受益組織」として否定されている。クラス反戦連合は北大における「誓約集団」「自発的結社」＝「全共闘」としての位置にあった。

#### (4) 五派連合と革マル派

次にセクトの動きを見て行こう。北大内で確認できる反共産党系の主要セクトは次の通りである。①社学同＝学生戦線、②反帝学評＝反戦反安保行動委員会、③中核派＝反戦会議・マルクス主義研究会、④革マル派＝反戦闘争委員会・全学闘争会議。

このうち①②③にクラス反戦連合と学部共闘が合体して「五派連合」と呼ばれ、北大全共闘に連なり、④の革マル派と対立することになる。五派連合のなかでいち早く全共闘結成を提起したのは反帝学評である。4月末から5月にかけて、「大衆的全共闘運動」の構築をかかげている<sup>(99)</sup>。

5月に入り、五派連合と革マル派は学長団交で三項目要求―①4・14学長告示、4・26学長通達を撤回せよ、②4・28の学内戒厳令を自己批判せよ、③一切の処分策動をやめよ―をつきつけた。以後、三項目が反学長派の共通要求となる。20日には革マル派が本部を封鎖し、翌21日に革マル派と五派連合が学長団交を行う。これに対して、学連系の動きを見ると、20日に道学連主催の演説会「当面する大学問題と全学連の立場」が450名を集めて開かれ、手嶋繁一北大学連委員長が「全共闘、の理論と行動」を演説している<sup>(100)</sup>。また21日には全北大共闘主催の本部封鎖糾弾集会に3000名の学生・教職員が集まっている<sup>(101)</sup>。一方、五派連合・革マル派を後押ししたのは、24日の東大・日大・全国学園闘争勝利労農学連帯集会である。札幌市民会館に1500名が集り、東大全共闘・日大全共闘の闘争報告および東大助手院生共闘（最首悟）の講演があった。終了後、700名で無届デモを行っている。26日には五派連合200名が本部封鎖をする。堀内は31日付発行の『11<sup>th</sup> 北大祭』プログラムに寄せた挨拶の中で、「決意を新たにして大学の自治を守り抜かなければならぬ。それには外の圧力と相呼応して批判を封ずる内の暴力を一致協力して排除するしかない」と訴えた。30日には革マル派が教養部を封鎖する。

6月5日から6日にかけて、学連系の全学連行動委員会200名が本部封鎖を解除する。これに対して五派連合系は、「確かに本部封鎖は解除されたが、全学バリケード封鎖の持つ意味がここに今はっきりと示された。即ち〈本部封鎖解除〉によっては〈何ものも解除せず〉〈何ものも生み出さない〉〔中略〕〈大学の自治〉なる幻想、仮象に立脚したこれまで通りの日常性―社会、大学、教育、自己の根底からの問いと闘いを忘れた秩序の回復でしかない」と反論した<sup>(102)</sup>。しかし、その主張は強弁であったが、ナイーブな響きがする。封鎖解除が〈何ものも生み出さない〉ものだったとするならば、封鎖それ自体も〈何ものも生み出さない〉ものになってしまうからである。この点では、「バリケードを取り除いて回復した「秩序」とはどんな秩序でしょう。大学の根本的な在り方を変えないで、どんな「民主的」な教授を増やしても、大学の機能を「民主化」しても問題は解決しません<sup>(103)</sup>」という声の方が本質的な問いかけだっただろう。

ともあれ、民青の姿勢は厳しかった。すでに五派連合や革マル派は国家権力の「補完物」「反人民的刃」であると断じていたが、<sup>(104)</sup>五派連合が学連による封鎖解除を暴力的だと非難している点に対して、「理性的な話し合い」を拒否した五派連合は「大学に存在する必要はないし、又社会的にも抹殺される以外にない」と強烈な反批判を<sup>(105)</sup>している。封鎖派学生に対して、教養部の学生から次のような実力行使論も生まれていた。「たしかに、圧倒的な学生の団結によって彼らを政治的に孤立させることができれば、自主解除の可能性もないとはいえないが、その場合も、いざとなれば実力解除も辞さないという我々の断固とした決意を示すことが不可欠の要素となる〔中略〕彼らがあくまで自主解除を拒否する可能性は大きく、そのような時には我々は断固とした行動をもって対処しなければ<sup>(106)</sup>ならない」。さらに教育学部院生協議会も次のような暴力論を展開した。「一般的な暴力否定では通用しなくなった段階、大学自治を破壊する暴力を否定する為に、暴力、を用いなければならない段階にまで事態が進展していたこと、それだけ、大学自治が危機に陥っていた<sup>(107)</sup>」。また、「我々の基本的立場は、封鎖・暴力一般に反対しない」という声も公然と<sup>(108)</sup>発せられた。大衆的討議を経ず、政府の大学介入に口実を与え、何よりも「学生に対する暴力」は否定されたが、暴力一般が否定されていたわけではない。<sup>(109)</sup>前年末から新年初め（④-1参照）にかけて学内で暴力事件が頻発し、暴力状況は止めようのない段階に達していた。

この間の革マル派の主張もまとめておこう。革マル派は全学闘争委員会（全学闘、後述）名で「討論資料 4・28 沖縄闘争勝利！安保粉碎！全学スト実現の為に」Kを出している。それによれば、社会学同と中核派は「革命」主義、クラス反戦連合などのノンセクト・ラジカルは「単純破壊主義」と<sup>(110)</sup>された。また全学部反戦闘争委員会「5/21 学長団交貫徹・対評議会抗議闘争に総力をもって決起せよ！」Kは、五派連合は自治会を学生運動の「場所」ととらえることが出来ず、そこから離脱しようとしている、それは「はみ出し運動＝裸踊り」、「いわゆる「全共闘運動」なるものにほかならない」と批判している。前年来、自治会選挙に熱心だったわけがここにある。

## (5) ベ平連の動向

ベ平連はどうしていたのか。4月26日の羽仁五郎講演会開催をはじめ、毎週金曜夜に定例会をもっている。6月2日は青医連（青年医師連合）・助手院生共闘会議と青空集會、<sup>(111)</sup>同4日も同じく三者で討論集會を開いている。<sup>(112)</sup>6月5日の本部封鎖解除に関して、[6.5における封鎖解除の事実経過]Kを配布し、「客観的事実経過」を報じた。のちに評論家的立場を自己批判するが（後述）、ここでも次のような暴力論が見られた。

ベ平連としては、単純に暴力を一般化してすべてを否定する事はしない。しかし過去一貫して、事のいかんを問わずして紛争の解決に暴力を用いる事を断固糾弾してきた民青系諸君が、自ら捨てろと叫んできたヘルメットとゲバ棒を持ち、実力闘争を組ながら、なおかつ「暴力学生帰れ」と叫んでいた事、また、「すべての行動は自治会の決議を通じてなされるべきだ」と叫んでいた彼らが自治会の決議もなく「実力封鎖解除」に出た事。以上の二点にわたって、彼らの理論は一貫しておらず、破産している。

ベ平連の暴力論には一種の甘え、油断があった。前述したように、民青系・自治会系の暴力論はその上を行っている。反対勢力が暴力を振るうならば、対抗的に暴力を行使するという「敵の出方」

論、正当防衛論である。しかし、その代償は高くついた。後述するように本部封鎖解除後、教養部では6月7日の学生集会に続き、11日の学生大会で民青系執行部がリコールされる。13日の北大闘争討論集会「悪臭を埋葬せよ!!—我々にとって北大闘争とは何か—」に続き、14日には教養部平連結成討論会が開かれ、失われつつある「徹底した討論」の回復をめざした<sup>(113)</sup>。15日には樺美智子追悼九周年70年安保粉砕労学総決起集会を開いている。

ベ平連の活動で注目されるのは、自主講座である。7月に以下のような講座が開講されている<sup>(114)</sup>。「怪談の裏面」「疎外論」「討論会 反大学の思想」「或る大学教官の告発」「映画 日大闘争の記録」「西ドイツ社学同の運動形態について」「自然科学の意義と責任について」「仏・五月革命における学生と労働者階級＝北大闘争と労働者階級」「ヘーゲル哲学の概観」「フォイエールバッハ、マルクスの思想」「科学者運動」。最終回に討論集会がもたれた。自主講座運動はベ平連の北大闘争への「主体的参加の第一歩」であり、「これまで、四、五、六月において北大闘争の解説者であり、討論集会の司会者であり、「さあ！封鎖学生の意見を聞きましょう」という形であった。さらに「一般学生からは、民青と五派連合のゲバルトの中に入って、仲裁をする、ものとしてとらえられていた時点から、一步脱皮したものであった」と総括された。自主講座には毎回100～150名の参加者があったが、「大衆に対するサービス機関」化という反省も出された。クラス反戦連合系の教養部闘争委員会（後述）も9月から10月にかけて自主講座を開いている<sup>(115)</sup>。

## ⑤……………大学立法とバリケード封鎖

### (1) 民青系執行部リコールとC闘委の結成

6月9日、ベ平連・クラス反戦連合・社学同・反帝学評など約500名によるアスパック粉砕闘争街頭デモが行われ、その勢いを得て、同11日の教養部学生大会で五派連合・革マル派の連合提案である民青系執行部リコール案が可決する（賛成1098、反対947）。当日の議案書（基調報告）[[「大学管理・解体法」の廃案めざし、全学友の統一で新たなスト体制をかちとろう！] Kは、次の五項目を掲げている。

- 全国共闘を結成強化し、全国統一闘争で大学管理、解体法案を粉砕しよう
- 政府、文部省の介入を排し、砂沢教育学部長の発令をかちとろう
- 教養部の民主的変革の巨歩をふみだそう
  - ・ 教養部長選挙に学生を参加させよ
  - ・ 自治会を即時・無条件に公認せよ
  - ・ 新寮規撤回、民主的新寮を建てよ
  - ・ 掲示・集会規定を撤廃せよ
- 五派・革マル等暴力学生集団の「本部再封鎖」, 「全学封鎖」の策動をゆるさず  
彼らの武装を解除しよう
- 機動隊の学内介入反対

これらを提案した執行部がリコールされた瞬間と思われる写真がある。会場の体育館にクラス旗を手に集まった学生たちから紙吹雪が上がっている<sup>(116)</sup>。さらに五派連合・革マル派は三項目要求貫徹に加えて、①大学立法・中教審答申粉砕闘争をバリケードと無期限完全ストライキで闘う、②6月

5日の本部封鎖解除に対する評議会の黙認・承諾の自己批判を求める、も提案したが、定足数を割り学生集会となったため、いずれも可決保留となった。<sup>(118)</sup>過半数の学生は民青系執行部にノンを示す一方、全学バリケード封鎖には二の足を踏んだと思われる。この後、7月の農学部選挙で民青系は辛勝するが、年末選挙では工学部や獣医学部とともに民青系は敗れる。

このように学内政治状況は変動しながら、「大学の運営に関する臨時措置法」(5月24日国会上程)、いわゆる大学立法の阻止に向けて全学的なストライキ体制が構築されていく。文学部自治会は5月初めに「決起せずして、君は大学に学ぶを得ず!!」と訴え、長期スト体制を提起した。<sup>(119)</sup>その後、上程阻止の全国ゼネストが計画され、<sup>(120)</sup>採決が夏休みに入ることが予想されていたため、夏季闘争が提起されていた。<sup>(121)</sup>学科単位の動きも起こっている。5月29日には文学部日本史専修科学生が決議「大学立法粉碎・中教審答申粉碎・文学部民主化推進のための闘いを全文学部人は団結して闘おう!!」Kを発表している。目を引くのが学科の全構成員122名が大学立法反対声明をあげた工学部建築工学科である。6月17日付の声明は「法案にたいする断固たる反対の態度と、大学の本来あるべき姿の追求」を訴えている。<sup>(122)</sup>

その後、6月23日第一回北大一万人集会、7月1日第二回北大一万人集会、同12日第三回北大一万人集会、同26日立法徹底粉碎全北大集会、8月2日第四回一万人集会と続く。同法は8月3日に強行採決されるが、翌4日の北大共闘主催抗議集会は立法反対の意志を表明した。これらの全学集会のうち第一回集会は正式加盟団体58団体、オブザーバー11団体、参加者4500名が参加し、60年安保闘争時を上まわる規模だった。<sup>(123)</sup>立法徹底粉碎全北大集会および第四回一万人集会には堀内学長も参加し、全北大集会では「法案が国会を通っても通らなくても、こうした〴〵化けもの、は形を変え、いつかは現われてくる。また学内には暴力集団があり、腹背に敵がいるわけだが、大学自治を守るため、自信と勇気をもって戦う」と決意表明している。<sup>(124)</sup>

一方、6月15日には全国的に反戦・反安保・沖縄闘争勝利六・一五統一集会がもたれ、札幌でも①北海道反戦青年委主催集会に反帝学評系300名の参加、②革マル派集会に300名の参加、③反日共系学生(革マル派・反帝学評を除く)・中央反戦主催集会に1000名の参加が見られ、とくに③は札幌駅前まで4000名近い大集会となり、夜遅くまで2000名のデモが続いた。<sup>(125)</sup>

第一回北大一万人集会が開催された6月23日、クラス反戦連合と社学同を中心に教養部闘争委員会(C闘委)(準)結成大会が「全共闘結成の第一歩」として開かれている。これをふまえて、同28日未明に社学同によって教養部が封鎖される。C闘委、学部共闘、反帝学評、フロントなども支援したが、五派連合内には「批判的空気」があり、とくにC闘委からは疑問や批判が強く出たという。<sup>(126)</sup>教養部封鎖は11月まで続くが、さらに7月4日には学部共闘(理闘委、獣反戦、経闘委、法反戦、工共闘、農反戦、文共闘、教育反戦、医自治評)、C闘委、全学助手院生会議の本部封鎖、同10日に革マル派の図書館封鎖、8月17日に社学同・社青同・反戦青年委の文系四学部封鎖、9月17日に医学部の医学部管理棟封鎖、<sup>(127)</sup>同25日にC闘委の古河講堂(教養部仮事務室)封鎖、10月4日に全共闘の旧教育学部棟(仮本部)封鎖、12月10日に革マル派の教養部封鎖、同15日にC闘委の体育館・小体育館封鎖が行われた。

北大新聞は校舎封鎖の拡大を、「学内闘争=全社会的階級闘争の一翼という地平」への到達であり、「市民社会秩序の崩壊への攻撃の一翼」ととらえている。<sup>(128)</sup>運動の学外への拡大がめざされていた。

## (2) 北大全共闘の結成

北大全共闘の実質的な始動についてはふれてきたが、正式な結成はいつだろう？学内民主勢力を糾合した北大共闘と紛らわしい名前の北大全共闘は、前述のごとく、すでに4月時点で結成の志向が生まれ、6月にはC闘委によって歩みが始まっていた。社学同の上部団体共産主義者同盟は、8月初め教養部無期限バリストを全学無期限バリストに拡大して、「北海道全共闘連合」を結成し、「ソビエト運動の一環」に発展させることをアピールしている。<sup>(130)</sup>前掲『11・8裁判闘争記録Ⅱ』は8月17日に北大全共闘準備会が発足したと記す(30頁)。同30日に教養部封鎖派闘争委員会主催で教員と学生の討論集会が開催されるが、会場に「北大全共闘」の横断幕が掲げられている。<sup>(131)</sup>討論集会は9月10日にも予定され、主催者は「北大闘争勝利全学共闘会議(準)C闘委」となっている。<sup>(132)</sup>8月中の準備会結成は間違いない。

全国的にはかなり遅咲きの全共闘だったが(九大全学共闘会議準備会結成大会も9月3日開催と遅い)、全国全共闘連合の動きに呼応するものだった。9月5日に東京日比谷野外音楽堂で2万数千名を集めて開かれた全国全共闘連合結成大会には、北大全共闘から50名が参加している。<sup>(133)</sup>その準備として7月30日には全国全共闘代表者会議がもたれ、北大学部共闘(理闘委・工共闘・農反戦・薬反戦・獣医反戦・文反戦・経闘委・法反戦・教育反戦)と助手院生共闘会議(青医連)から代表者が出席した。<sup>(134)</sup>この段階で北大全共闘の結成は9月に予定されている。

全共闘に対立する革マル派の主張も全北大反戦闘争委員会『戦列』Vol.3 Kから見ておこう。「N・R〔ノンセクト・ラジカル〕の自己否定にもとづく大学解体の泥沼的發展のからみあいイデオロギー的支えとし、N・Rの小ブル的主体性論に基づく自治会否定と、B・B〔ブント・中核〕による革命主義にもとづく「ポツダム自治会終焉」論を基礎とした少数者による封鎖→占拠→民青(機動隊)との武装対立といった方向でその学園闘争が闘われている」。そのうえで革マル派は全共闘結成に関して、全国全共闘連合との関係、北大闘争と教育闘争・政治闘争との関連、革マル派排除の如何について公開質問している。<sup>(135)</sup>

北大新聞によれば、北大全共闘の正式結成は準備会発足から2か月近くも経った10月9日である。封鎖中の法文系軍艦講堂に250名が参加して結成大会を開いた。議長団はC闘委・学部共闘が各2名、<sup>(136)</sup>医学闘・反帝学評・中核派・社学同・安保共闘が各1名、計9名だった。クラス反戦連合が忌避したセクト連合そのものではなかったが、限りなくセクト連合に近い組織として結成されたといえよう。しかし、全共闘がすでに実体化していたからであろうか、北大新聞の取り扱いは見落とすほど小さかった。同16日に全共闘は文学部内で記者会見を開き、次のことを声明している。<sup>(137)</sup>

一、国家権力、ブルジョアジーは、京大、九大、早大と、拠点校のバリケード破壊に狂奔している。これは個別学園闘争の圧殺のみならず、目前に迫った佐藤訪米反対闘争の壊滅をねらった不当な予防検束措置だ。

一、北大におけるバリケードは、北の拠点、として注目され、すでに国家権力、大学当局により機動隊導入が日程に上っているが、われわれは全勢力をあげ戦い抜く。このための万全の準備も整えている。

一、その戦いは、東大はじめ全国各学園におけるものより、質、量とも上回るし(熾)烈なもの

になろう。

一、10・21の国際反戦デーは首都の戦いに呼応、徹底した戦いを行なう。

(後略)

過度の意気込みで全共闘が結成されたのに対抗して、10月14日、革マル派は安保粉碎北大闘争勝利全学闘争会議(全学闘)を立ち上げ、「我が『全学闘』は、この北大学生戦線の最強の部隊となるであろう」と宣言した。<sup>(138)</sup>全学闘自体の存在はすでに4月段階で確認できるが(④-④)、あらためてこの段階で「安保粉碎・北大闘争勝利」を前面化して、全共闘を上まわる決意で、学内のヘゲモニーを握ろうとしたものと思われる。

### (3) 民青・学連と「一般学生」のはざま

全共闘や全学闘、諸セクトと民青は厳しく対峙していた。ここでは民青の理論的立場を2点にまとめて見ていこう。ひとつはトロツキズム批判である。反共産党系セクトはトロツキズムを信奉する暴力集団・挑発集団・反革命集団とみなされた。<sup>(139)</sup>しかし、当時、「学生運動に全存在を投入し、その生活は卒業するまでほとんど『職業的革命家』のそれに類似していた」ある活動家は約20年後、トロツキズム批判がスターリン神話であったことを次のように自己批判している。

日本におけるスターリン神話の変種をひとつだけ挙げてみよう。かつての大学闘争期の反「トロツキスト」闘争の「指導的理論書」であった、榊利夫氏の『現代トロツキズム批判』〔中略〕だ。〔中略〕一字一字書き写しながら、身体がガタガタと震えてくるのを抑制しえない。当時のゲバルト闘争、ヘルメット、鉄パイプ、石、笛の音、旗の林立、の世界に心が飛ぶ。当時の北大構内のさまざまに色分けされたヘルメットの乱舞する騒乱状況がしっかりと再現されてくる。東大安田講堂の前を夜間、わが全学連のブルーの旗を掲げて、全国からかけつけた戦友とともに「トロツキスト」にたいする威嚇デモの隊列のなかで気焰をはりあげていた自分に同化し、いたたまれなくなる。〔中略〕多くの人々の戦闘的と呼ばざるをえない努力のおかげで、今の私はここに書かれていることはほとんどすべて虚偽であることを事実によって証明できる。<sup>(140)</sup>彼は反「トロツキスト」闘争を自己批判し、「トロツキズム」に屈服しているのではない。反「トロツキスト」闘争がいかにスターリニズムに毒されていたかを自己批判し、トロツキーの歴史的実相を解明することの重要性を唱えているのである。

もうひとつは日本革命論である。北大全学委員会69〔今日の学園闘争と日本革命の展望〕Kは、「授業料値上げ反対、不当な学生処分撤回、学生の自治活動の自由の保障、学生寮や学生会館の自主的な管理運営の確立、学生の権利を抑圧する制度慣行などの民主的改革、教官人事・カリキュラム・学長選挙への学生の意思の反映の保障、米軍資金の導入反対、大学支配反対」などは「民主々義的性質の要求であり、しかも、これらの要求の実現それ自体としては、いずれも、社会体制や国家権力の変革をなんら必要とするものではないし、現在の法律の改廃さえほとんど必要としない」が、これらの「要求の実現のために闘かうことなしには、革命勢力の力量の増大もかちとりえない」、「大学の自治と学問の自由を擁護する闘いは、最も鋭い反権力闘争であり、「大学解体」は権力の前で武装解除するにもひとしい」と論ずる。この点から描かれる大学革命路線は、「反帝反独占の民主々義革命による人民権力の樹立」→「社会主義的変革への連続的發展による労働者階級の権力の確立」

→「人民の民主主義あるいは社会主義日本の大学」という道程になる。民青文学部班も革命コースを「佐藤内閣打倒→政治危機→連立内閣→政治危機→民主連合政府→革命政権樹立！」と展望している<sup>(141)</sup>。

民青の革命論は議会主義だった。北大全学委員会『若き戦士』Vol.1 No.1 Kは特集「マルクス・レーニン主義の革命的議会闘争」を組み、長沼基地闘争においても、「マルクス・レーニン主義の議会の革命的利用の生きた姿をみよ!!」と訴えていた<sup>(142)</sup>。興味深い史料もある。共産党系では珍しく、「大学問題が重要な対決点となっている現情勢の中」と留保をつけながらも、「民主主義発展擁護のヘラルドは学生戦線が握っている」と学生運動ヘラルド（先駆性）論を展開する民青理学部極光班<sup>(143)</sup> 69.9.9「70年代闘争の勝利の展望に立って、秋の壮大な闘いに決起せよ！」Kである。先駆性論は50年代に武井昭夫、門松暁鐘（廣松渉）が唱え、60年安保闘争期の全学連の理念となるが、元来、〈学生は小ブルジョア〉と規定していた共産党内では否定的に受け止められ、他セクトもそう理解していた<sup>(145)</sup>。この時点で民青内に学生運動ヘラルド論が起こってきた背景には、対立セクト、たとえば、社学同が〈学生＝小ブル・ルンペン〉とみなす「ブベツ〔侮蔑〕の思想」に立っていたことへの批判<sup>(146)</sup>があったと思われる。学生運動ヘラルド論には、前衛党の指導を乗り越え、全学連党の結成を志向したといわれる70年代前半の民青内の「新日和見主義」との関連がうかがえないだろうか。

さて、トロツキズム批判論と日本革命論が唱えられる中、「一般学生」はどのような反応を見せていただろう。文学部のある学生は「擾乱が流血が、腐爛した学堂を驚懼させている」「一般的暴力反対論に向けて振りかざされる鉄管は一その肥大する日常の獣路を通して、総体的暴力肯定へ人を誘う罠ではないか?」「意味もない流血が、あの悍しい糾弾や、忌まわしい物神化を惹起する時の、傍観者たる我々の存在は何だ、学問とは何だ!」と憤りとも嘆きとも言えぬ問いを自らに発し、事態の深さに身悶えしている<sup>(147)</sup>。

文学部西洋史学科共闘（準）は民青と全共闘の双方に批判的だった。校舎封鎖は「闘争の独占・私物化」だから、逆に「開放」すべきであり、封鎖解除は「徹底した討論」を通じた封鎖派学生の「自主撤去」が望ましいと述べ、研究空間の「自主管理」を主張した<sup>(148)</sup>。

教養部のあるクラスは、「過去の運動形態」には期待できない、反自治会系のセクトを「暴力集団と決めつけ得ない「何か」が我々を内面から揺り動かして来つつある」、その「何か」とは「自己否定」である、これまでの自治会活動は「自己満足的にしか成果を評価しえ」ず、「運動の目的化が大衆を運動から遠ざけた」と論ずる。さらに今日の権力者がもっとも恐れるのは「組織化され、殆どドグマ的になっている既成集団ではなく、未組織者群の下からの盛り上がりによる所の大衆運動」、すなわちノンセクトだと規定する。そこから大学機構への学生参加を求め、その実現に向けた「無期限完全スト」を提起した<sup>(149)</sup>。

あるいは「造反」教員花崎皋平の「北大1969年4月—8月 私はこう考える」<sup>(150)</sup>は、封鎖支持派の学生が詠んだ一片の詩を紹介している。

僕らは ランボオのごとく A・ブルトンのごとく 歌うことも 語りかけることも  
できなくても 沈黙のうちに 根源性にふれることはできる  
反逆は美しくはなくても 醜くもなくてただ根源的であるのだ  
きれぎれの言葉の内には 空洞があった あの論理の寂莫の隙間に

---

僕らの訴えがある

青春は美しくはなく 成長の季節でもなく 人生における最前線であるにすぎない

僕らは老いることを拒否するために この陣地を死守しようではないか

この詩を花崎は、「日常性に眠り込んでいる自他を否定して、闘いの日常性を構築せよという呼びかけ」「日常性とその下での饒舌な言葉のもつ権力的機能を否定して、言葉を行動のきっさきへ位置付けようとする叫び」として聞いている。

これらの声はもちろん一部の声である。しかし、「無期限」化や「日常性」化によって闘争の時空間をシームレスな世界へ転換させる渴望は共通している。また、組織化や目的化を相対的にとらえる眼差しも強い。「自主管理」「無期限完全スト」「最前線」「陣地」に込められた想いとは、「目的」「組織」「ドグマ」あるいは「論理」からの解放だった。

#### (4) もう一つの「自己否定」

「はじめに」で述べたように、「自己否定」は全共闘批判の民青系学生にとってもマジックワードの響きがあった。これは決して過大評価ではない。文学部民主化行動委員会(準)の場合を見れば、明らかである。同委員会(略称LDAC)は69年5月上旬に準備会を結成し、文学部の旧態依然たる寡頭支配・閉鎖的体質<sup>(151)</sup>を打破すべく、次のような思想的地平に立った。

重傷に陥った本学部の治療は、単に管理運営の民主化という形式面だけではなく、学問研究・教育内容の変革をも含めた総合的な改革によらなければならない。われわれの大学批判は、そのまゝ、われわれ自身にもむけられるべきである。学問内容の変革とは、まさしく、われわれの学問そのものに対する姿勢の変革抜きには語れない。学園民主化は、決して単なる機構改革に解消されるものではなく、学問の担い手たる大学人の自己変革に裏づけされるのでなければならないであろう。従って、われわれは、機構上の講座制の打破と並行して、われわれ自身の閉鎖性＝自己完結性即ち「心の講座制」の打破を遂行しなければならない。

LDACは「文学部変革をめざす自覚的學生が、主義の相異を越え、行動する有志の集り」であり、「自立的組織として、自治会機関や他の学内団体に拘束されることなく、自主的・独自の行動」し、その「行動は、参加諸個人の責任に基づく」とされた。構成員は「一自治会員として、自治会民主主義の徹底化と、自治会の原則的強化の責任を持ち、自治会機関、学友にアピールし、民主化闘争を下から形成する」ことが求められた<sup>(152)</sup>。LDACは自治会に結集しながら自立・自主・独自の立場から民主化闘争を切り拓く〈自治会全共闘〉とでも言うべき存在だった。次のような宣言が見られる。「われわれの立場は、変革・創造の立場である。われわれにとっては「大学解体」といったラディカル運動的アナキズムはのりこえられるべき対象である。われわれは文学部変革をラディカルに担いたいと思う。しかし「ラディカルとは根源的ということである」(マルクス)のであり、徒らな表面的急進性を否定し、〈社会—大学—われわれ〉の存在の深部から、われわれの指針をつかみ出すのでなければならない<sup>(153)</sup>。

LDACは学部改革案として、研究室会議の恒常化、文学部人集会の制度化、各専修科代表審議会の設置などを掲げたが、それらは次の「自己否定」論を基盤<sup>(154)</sup>にしていた。

われわれの「自己否定」「自己変革」は観念的なものであってはならず、学部変革の実践を媒介

---

としたものでなければならない。この点を捨象した闘争は、如何に急進的に見えようとも、根源的＝ラジカルなものではない。〔中略〕現実との鋭い対決を回避し、「自己否定」の観念操作によって実は「自己閉塞性」を温存し、自己の思想的ぜい弱性を「武装」「占拠」によって補完する安易な闘争形態は否定されるべきである。

LDACの「自己否定」とは、「自己変革」「自己止揚」であった。封鎖派学生への視線は極めて厳しかった。LDACのビラの手書は自治会執行部のそれと酷似しているのに、メンバーは重なっていないと思われるが、文学部全共闘（文反戦）批判ビラの手書は異なり、「彼ら〔文反戦〕が誇るべき引き出し論が、恐るべき立法引き出し論、戦争引き出し論が、彼らのアナーキズム、ファシズムを貫徹させる最も有効な手段であるのだ！」「彼らは、自らの出発点の美しい！いかにも美しい魂を荒廃させ、そしてその荒廃そのものを志向し始めた。」「日常性打破なる文句は、〔…〕彼らの自覚した表象的抑圧を生理的な次元での一時的な解放の根拠づけになっている将しく貧困な、否、前論理の彼らにとっての子守歌である。がしかし、我々は、単にこれを狂気の子守歌として見過すべきではない。これはファシズムの子守歌である！」と指弾を重ねる。堀内学長の全共闘学生観と通ずるところがあるが、LDACは文反戦の主張を「たわ言」と切り捨て、「理論的にも実践的にも完全に解体」している以上、「もはや、我々の狂暴な批判精神は、彼らに向けた所で充足されるものではない」と暴力的な勝利宣言をし、最後にこう結ぶ。「文反戦諸志も、我々文学部民主化行動委員会へと発展的に解体した形で参加せよ！」<sup>(155)</sup>〈自治会全共闘〉は全共闘に真の「自己否定」を迫り、「自己変革」「自己止揚」「自己解体」を突き付けたのである。

## (5) 院生協議会と助手院生共闘

学部生だけではなく、大学院生や助手の動きも活発化する。1969年6月下旬、全共闘系の助手院生共闘は大学立法粉碎闘争を呼びかける一方、同24日には共産党系の全学助手会連絡協議会も「大学立法に反対する声明」を出す。

のちにフランス革命史家となる森山軍治郎はこのときドクター2年目だった。文系校舎封鎖時、森山は必ずしも封鎖賛成ではなかったが、封鎖に真正面から向き合おうとしない教授会に不満を持った。まわりの院生もそうだった。そこで「教授会に殴り込みをかけようということになって、森山はその先頭に立って乗り込み、二十分くらい演説をするように友達に言われた。やらざるをえなくなった森山は、将来大学の教授になろうと考えていたから、これで将来の道は絶たれたと思った。子供も生まれていたので始めはその事で眠れない夜が続いたという。しかし次第に腹も据わって、教授会当日に先頭に立って乗り込み、先生達の前で二十分くらいしゃべった。それ以来恐かった先生達が全く怖くなくなった」<sup>(157)</sup>。その後、教授から助手をやらないかと誘われ、森山は助手となる。

生殺与奪権を握る教授に異論を唱えることは、助手や院生には恐怖であったらうか。必ずしもそうではない。5月に理学部助手院生共闘会議が結成されるが、<sup>(158)</sup>共闘会議のビラは「理学部に幽霊が出る……それは理学部助手院生共闘会議と呼ばれている」と書き出して、「現在の大学紛争を自己への告発としてとらえることなく安易に旧来の制度と妥協し、運動の抑圧をはかろうとする人々に、心の底から恐怖心を催させるに足るような精神的、思想的バックボーンを持ちたい」「私たちへの恐怖心はダイナミックな現実に対する退嬰的な恐怖心であり、来たるべき未来に対する恐怖心であ

る！」「可能な限りの内面的動揺を与えたい」と述べている。彼らからすれば、かかる「恐怖」「動揺」関係を結んでいる教員と助手院生が「北大人という怪しげな存在」として相互に結び合えるはずがなかったし、全国学園闘争の中で、「全北大が沈黙を守って来られたのは、かゝる精神の基礎を成す学問至上主義と二流のエリート主義とを右と左から擁護して温存して来たため」<sup>(159)</sup>だった。なお、彼らの主張に対しては即座に自治破壊という批判が起こっている。<sup>(160)</sup>

文学部では、助手院生共闘と学部闘争委員会（準）が行動を共にしていた。彼らは「封鎖が研究・教育を阻害するのではなく、阻害（＝疎外）され、歪められた研究・教育の在り方を封鎖によって告発した」という論理に立ち、「現状〔封鎖〕こそが、不当なのではなく正当なのであり、異常なのではなく正常なのだ」と主張した。<sup>(161)</sup>

しかし、助手院生からは、「学問の場を獲得」（理学部）、「真にあり得べき大学や研究・教育についての方向性」（文学部）の声も聞こえる。学問の世界に踏み込んでいた彼らの正直な願いだっただろうし、その声は学部生にも反響した。理工系学部共闘はこう吐露している。「全ての学友諸君、就中校舎封鎖中の学友諸君、一日も早く勉学の場に臨みたいと願っていることであろう。我々として同じなのだ。勉学への情熱は人一倍持っている。」<sup>(162)</sup>

一方、教育学部の院生からは機動隊導入論が起こる。学内には①反動勢力による悪意にみちた機動隊導入論、②善意からでた条件ぬき機動隊導入論、③暴力集団との話し合い解決論、④機動隊導入絶対反対論に意見が分かれているが、「われわれは、警察権力の人民弾圧の本質とそれをおおいかくすための公的な装いととの矛盾について、まれにめぐまれた条件のもとでは、機動隊に、封鎖を解除させることの可能性を否定するものではない」と一定の条件下で機動隊導入を容認していた。<sup>(163)</sup>

しかし、そのような「めぐまれた条件」など現実的にありえただろうか？容認論は教養部に飛火し、11月の機動隊導入直前に次のように新たな闘争を強いる判断に至る。<sup>(164)</sup>

評議会が場合（人命に危険のある時など）によっては、機動隊の導入もやむをえないことを確認したことに対して、ただちに評価を下すべきではないと考える。むしろ、基本的には反対である。しかし、重要なのは、機動隊介入をさせないという対権力の力関係をつくることであり、もし介入したときにも、常駐を許さない広範な声を形成しておくことである。

## ⑥……………封鎖解除の果てに

### (1) 堀内学長の心境

この時期の堀内学長の心境を推し量れるのが、いくつかの書簡である。ひとつは東京府立一中時代の恩師亀井高孝宛書簡<sup>(165)</sup>である。堀内はこう記す。「筋の通らぬ団交なるものを拒否して自宅に帰りましたところ、中学校で伺いました先生の講義の一節を思い出しました。「十字軍に猛烈な反撃をくわしたのはトルコ人によって洗脳され訓練されたヨーロッパ人の若者である」。これらの若者は昔の高等学校、今の教養生の年令だったと記憶しています。しかしこの年令の特徴が現われるのはゲバ棒にのみではありません。すぐれた教官の授業を恐ろしく熱心に自発的にうける一面もあります。結局マスプロで出来たすきだらけのところをつかれておかしな洗脳をされてしまったのは洵に残念

ですが、何とかまきかえしていかなければなりません。」マスプロ教育批判は堀内の持論だった。<sup>(166)</sup>  
堀内は1969年夏頃までは希望を失っていない。寮生からの激励の手紙へこう返信している。

私は今の状態を決して悲観してはいません。〔中略〕事件発生以前よりも北大はよくなると思っています。そればかりでなく大学改革を推進して模範的な大学をつくる絶好の機会だと思っています。二十三年前その案は教官たちの間だけで討論してとうとう北大ではつぶされてしまいました(特に教官の五年毎審査は全学の死にもの狂いの反対にあいました。)[中略]全学協議会も当時の革進的な空気の中から伊藤総長の提唱で出来ましたが、それが大学当局に都合の悪い調査結果を挙げるようになったら、つぶされてしまいました。〔中略〕学長提唱ではどうしてもひ弱なものしか出来ないで、今私自身から提唱するつもりはありません。全学の盛り上りを待っています。思い切って、大学に改革しましょう。協力を願います。

冒頭で述べた大学制度改革案や全学協議会の復活を狙っていた。いずれも教員層には不評で、とくに「教官の五年毎審査」は総スカンを食らったと回想しているが、興味深いのは反学長派の学生がこれを支持していることである。<sup>(167)</sup>④- (1)でのべたように教育学部は全構成員自治、学部長選挙のオープン化などを進め、助手の任期制も廃止した。これに関して、5月上旬に文学部反戦は「われわれの見解によれば、助手の解放は、助手の任期制の廃絶ではなく、教官一般の任期制の確定である。教育学部の民主化は、無党派的に言うならば、自己保存の論理の貫徹である」と主張している。教授の定期資格審査は他大学からも提案されていたが、<sup>(168)</sup>今日まで議論が続く教員身分保障の厳密化という点では、意外なことに学長と反学長の間にはミゾはほとんどなかった。

## (2) 国際反戦デー前後

夏休み中封鎖は続いたが、9月18日に教養部の授業が118日ぶりに再開された。同26日には文学部学生大会で封鎖反対決議があがる。<sup>(169)</sup>10月に入ると前述したように9日に全共闘結成、10日に羽田闘争二周年・十一月佐藤訪米阻止闘争、<sup>(170)</sup>14日に全学闘結成が続く。10日はベ平連、革マル派、全道反戦、全共闘・反戦青年委員会系がそれぞれ集会・デモを行ったが、中でも全共闘・反戦青年委員会系主催の労農学総決起集会には北大全共闘400名のほか1000名が参加した。集会の写真を見ると、全共闘、フロント(社会主義学生戦線)、青共同(青年共産同盟)、社学同などの旗に交じって、反戦高協(反戦高校生協議会、中核派)の旗も見える。全共闘系はベ平連と統一集会を開いた後、<sup>(171)</sup>2200名でデモに移っている。<sup>(172)</sup>

この勢いが10月21日の国際反戦デー闘争につながり、全共闘500名、革マル派500名、ベ平連1600～2000名と動員数は「飛躍的に増大」し、「従来の闘争を質量ともに陵駕」するが、「登りつめたという印象」もあつた。<sup>(173)</sup>ある参加者はこう述べている。

敗戦直後、国民的な窮えと失意の暗い戦災の巷に生み落されたぼくたち。二〇年間にわたって一人のヒーローもみないうちに、ぼくたちは危険もないかわりに何も感動することなく、中学を高校をそして大学をぐずぐす過ごしてきた。ぼくたちの青春とは耐えがたい「平和」と「民主主義」のなかで去勢されたかん官のように甘ったるくみじめなものでしかなかったぼくたちは目覚めながらの眠りに深くおちいってゆく自分を取りもどそうと、ピートルズをきき、フーテンにあこがれた。<sup>(174)</sup>

彼の感性は、年頭の「68年は、北大においても、エンブラ闘争で始った。我々は、その時、この北辺の地であって、政治の季節がめぐってきたのを知った。暗闇にゆれる真紅の旗に、70年の幻想をみた<sup>(175)</sup>」という感覚や、入学式直後の「68年から69年にかけての全国的学園闘争において獲得された質を、鋭敏に受けとめて何らかの形ですでに主体化し、新たな次元からの発想法を持つ新入生たち<sup>(176)</sup>」という感想とはあまりにかけ離れている。「目覚めながらの眠り」に陥っていたごく普通のノンポリ学生さえ覚醒して国際反戦デーに参加したということだろうか。「最後まで真面目で、暴力学生<sup>(177)</sup>というのとはちょっと違う人達が全共闘の中にたくさんいましたよ」という証言もある。正反対の証言もあるが<sup>(178)</sup>、覚醒が自律的だったことを次のC闘委の主張は示唆している<sup>(179)</sup>。

10・21に決起した三〇〇〇名の大衆は「壮大なゼロ」では決してない。革マル派諸君のように「彼らが反スタ前衛党に指導されていたかどうか」とか「マルクス主義者たらんとしていたか云々…」という一切の観念のおしゃべりはやめよう。確かに即時的意識のままではブルジョア社会の幻想へと包括されていく。しかし、大衆はバカではない。彼らを「指導するかどうか」が問題ではない。大衆は行動を、実践を通じ自らを鍛える。C闘委をここまで成長させたのは「マルクスの学習会」でも「反スタ前衛党の指導」でもない。

「観念のおしゃべり」や「即時的意識」は相対化され、「行動、実践」が重視されている。反スターリニズムや前衛、はてはマルクスまでもが捨て去られている。

### (3) 封鎖解除と機動隊導入

8月中旬以来、文系四学部の封鎖が続いていたが、10月9日に封鎖反対・自主退去を求める文系総決起集会が開かれて<sup>(180)</sup>いる。同20日に第二回、同30日に第三回がもたれ、文学部では封鎖解除実現実行委員会が結成された<sup>(181)</sup>。その結果、同30日、職組・院協・自治会などにより、文系校舎の封鎖が解除される。次いで11月8日に機動隊が導入され、事務局・図書館・教養部・旧学生会館の封鎖も解除された。

この直前と思われる堀内学長の心境が書き残されている<sup>(182)</sup>。道新に投稿予定だったが、顧問団会議で保留となり、発表されなかった。堀内は全共闘が「封鎖によって他の学生の勉学の機会を奪いながら、己の卒業実験や就職の斡旋を平気で教官に要求する自己至上主義」に陥り、一般学生から孤立しつつある、「この凋落から立ち直る何よりの妙手は機動隊の導入」だろう、やがて彼らは「封鎖建物を追われ消滅する」だろうが、「平静に戻るだけで吾々は満足することは出来ません。大学を直接国民に奉仕する大学に改革しなければなりません。その運動は既に学内の各方面に澎湃とおこっています。現事態の自主解決はこの運動の画期的な盛り上りの契機となるでしょう」と述べている。

堀内は10月2日の記者会見で機動隊導入を要請するつもりはないとしていたが<sup>(183)</sup>、封鎖派学生の出方次第では機動隊導入もありうると考えていたのであろう。堀内は機動隊導入後の対応に迫られることになる。同じく導入後を考えていた学生たちがいた。「大学状況分析三人会」（略称ダイジョウブサ）を名乗るグループは、「機動隊導入は闘争の前提だった」と語る。機動隊導入「後に《来る》ものは精神的荒廃とセミ無関心層に流されるみせかけの民主化のみ」で、「日常性への回帰の中で自己を見つめてゆくことのむずかしさ」の状態で、「個々の実践が問われる」と論じた。彼らにとって、「日常性への回帰」下の闘争こそが問題であった<sup>(184)</sup>。前述した闘争の「日常性」化とは、実のどこ

ろ、闘争のスケジュール化・ルーティン化などではなく、闘争の「日常性への埋没」化という恐怖だったのではなかろうか。

10月22日、緊急評議会は市民に迷惑をかけるおそれが生じた場合、機動隊導入もありうるとの新方針を出した。<sup>(185)</sup>同24日、堀内は国際反戦デーが近隣市民に迷惑をかけた謝罪文を新聞に掲載し、11月4日に封鎖学生に対して退去を勧告した。対抗するかのように同6日に全共闘系学生が自民党道連を一時占拠し、屋上から「七〇年安保粉碎、自民党政府打倒」「北大全共闘反帝学評、北大バリケード死守」「十一月佐藤訪米阻止」と書いた垂れ幕を揚げた。<sup>(186)</sup>結果的に11月8日に機動隊が導入され、事務局・図書館・教養部・旧学生会館の封鎖解除となるが、機動隊導入は大問題だった。65年5月に200名の機動隊導入事件が起こっているが、今回の機動隊員数はその時の15倍に及んだ。

前述したように反封鎖派内に機動隊導入容認論があったが、民青内部も割れていた。民青文学部班委員会の「内報」<sup>(187)</sup>を見てみよう。日付が確定できないが10月15日から同20日の間に出された第2号には20日の学生大会開催を前に決起を促し、「お互いがお互いの足を引っ張るような活動はやめよう」とか、「今までの活動の主要な弱点は何か？ それは、同盟全体に「やる気」がないことではなくして、むしろその「やる気」に答える適切な方針と指導の欠如である」と記されている。機動隊導入直前の11月6日付第3号も夏休み以降、活動が「息切れ」状態で「目に見える運動全体の発展がみられない」と指摘し、11月10日付第4号によれば、機動隊導入直前の同盟内では「機動隊介入問題について統一されていないことが明らかとなり、このままでは実際の介入時に動きがとれない、との判断のもとに、急遽、7日に活会を開くことを決めた」という。封鎖解除（自主防衛）をめぐっても議論が分かれ、院協、自治会、同盟の間に意思統一が進んでいない点が指摘されている。民青も内部に問題を抱え込んでいた。

11月8日の機動隊導入への抗議も込めた佐藤訪米阻止労農学総決起集会が翌9日に北大全共闘・札幌医科大学自治会・反戦青年委・ベ平連の主催で開催される。全道各地の地区反戦やマスコミ反戦をはじめ、反戦高協、反戦高連（反戦高校生連絡会議、革マル系）、高安闘委（高校生安保闘争委員会、ブント系）、高校ベ平連など参加者は2000名にのぼり、最高時には市民も合わせ3000名まで膨れた。<sup>(188)</sup>しかし、翌10日に堀内学長は機動隊の構内駐留を要請し、さらに11日に評議会は暴力行為・封鎖占拠などの禁止を告示した。同日に北大全共闘は「機動隊常駐体制粉碎」「団交貫徹」「首相訪米阻止」「教養部奪還」<sup>(189)</sup>などの闘争方針を発表している。

11月13日のストは1500名の参加<sup>(190)</sup>、16日の佐藤首相訪米阻止闘争は500名の参加だった。<sup>(191)</sup>12月10日に革マル派が教養部を再封鎖したのに続き、13日には全国全共闘連合第二回大会に向けて全共闘総決起集会が開かれ、15日にC闘委が体育教官室・小体育館を封鎖した。16日には学長・評議員が出席して全教養生討論集会が体育館で開かれ、学長追及集会になるが、物別れに終わっている。<sup>(192)</sup>12月23日の臨時評議会告示は暴力行為・不法行為即「有効適切な措置」、すなわち機動隊導入を明らかにした。

明けて1970年1月4日には機動隊が再導入され、教養部、体育教官室棟の封鎖が解除された。5日からは教養部の授業が再開された。

## ⑦……………「造反」の名のもとに

### (1) 発言する教員たち

札幌ベ平連代表の花崎皋平は来札した映画監督大島渚との対談で、<sup>(193)</sup>「私にとっていちばん深刻な問題なのは、ベトナム問題で、日本国民であることが、政府の政策をつうじて、ベトナム侵略への加担に組み込まれるのとおなじように、大学の教員であることで、政府・自民党の教育制度・政策への協力と学生管理への加担をしいられる構造そのものである」と論じ、学生たちの直接行動も「この構造自体への異議申し立て」で、「被害・加害が入りまじるこの構造は『帝国主義』そのものだと指摘している。

花崎の思いは重なる。花崎は1969年5月29日、東京・文京公会堂で開かれた「大学を告発する・全国大学教員報告集会」に北大から唯一人参加した。帰札後、北大新聞に前掲「北大1969年4月—8月 私はこう考える」(九月一日付)を載せる。

花崎は69年3月の卒業式に掲揚・斉唱された「日の丸」「君が代」にショックを受けた。「いったい大学にとって戦後二十数年はなんであったのだろうか。…この卒業式に象徴されるような大学の体質が、粉碎の対象となったとしてもそれは怪しむにたりないのではなかろうか。」ただし花崎を直接突き動かしたのはベトナム戦争である。「あきらかに、今日の学園諸闘争の発端はベトナム戦争であった。ベトナム戦争こそ、われわれの戦後世界認識を根本からゆさぶり、われわれ一人一人に、生き方の根底へせまる問いをつきつけたのだ。」「この問いかけが、日本帝国主義の戦争加担構造にめざめるきっかけとなり、そのような社会体制の中枢機構としての大学における自己の存在の意味を問うことへと深まっていったのである。」花崎は「一人のあたりまえの人間としてなにを許し、なにを許さないか」という問題を明らかにせぬまま、「たんなる専門的営為としての「研究と教育」に没頭する態度」がいかなる結果を招いたか「戦前の知識人、研究者たち」から学んだという。結論として、「大学が「理性の府」、「真理の府」であるならば、人間にとってもっとも根源的・普遍的な真理である人間の、人間に対する殺戮と抑圧の廃絶を語り、それを実践するための砦として大学を位置付けたいとは、私自身のねがいでもある。その意味において、大学が「反戦の府」となってもらいたい」と述べている。

花崎の言説はあらためて取り上げるが、他の教員たちも発言し出した。<sup>(194)</sup>4月24日に教養部教員28名による次のような声明が出る。

まづ力に訴えるというようなやり方は、今日の北大にとって、もっとも効果の薄い拙劣なやり方であると考えます。しかしまた私達は学長声明にみられるように、あの行動をただちにナチスのそれと同一視するつもりもありません。私たちはそれに参加した学生諸君がなに故に理性的対話の努力を放棄し力に走ったかを、少くとも心情的には理解しているつもりです。しかし理性とは、そのように自らを断念し放棄せざるを得ないような苦しい時にこそ不死鳥のように甦るべきものであり、それこそが理性の名に値するものであります。そして大学とは何よりもまず理性の府ではないでしょうか。〔中略〕私達は諸君と同じ学園に住む先輩後輩として相互に信頼の中で、建設的、創造的解決への途を見出しうるものと確信しています。

教員たちは学生と学長の双方を批判し、「理性」の立場を強調した。これに対して、即座に批判したのは院生協議会である。院協は教員たちの「暴力学生集団」へのシンパシーは極めて遺憾であり、「中立的、調停的、傍観者的な非実践的態度」だと非難した。<sup>(195)</sup>

その後、7月15日には「全北大教官・事務官・院生・研究生・学生有志」(300名署名)の大衆的討論集会開催に関する「評議会への要望書」<sup>(196)</sup>が出されている。有志らは「「論理と論理との対決」を経て初めて「理性の府」なる大学として、解決策を見出せるのではないのでしょうか」と問いかけ、「少数の意見、異端の意見」を尊重し、「形式的、機械的な民主主義」を乗り越えることを求めた。これに対し、評議会は全学討論集会の前に各学部の討論集会が必要だと応えた。

8月26日付の大学状況教官懇話会(呼びかけ人教養部教員13名)『現在の事態と教官の自己回復について一自由で小さな運動体結成のための趣意書』Kは、次のように論ずる。

- ①「〈自主解決〉路線の破綻」により、「学内与論の圧迫による封鎖派の孤立と自己崩壊を期待するという意図」「全学的合意と統一行動という一元的幻想」は崩壊しつつある。我々は「全学的意思統一を追求する政治主義的発想」から離脱したい。
- ②学生たちは「大学の制度的変革」「権利の制度的増幅」「政治革命」を追求しているのではなく、「多次元の諸抑圧からの全的解放」を志向している。それは「革命主体としての自我構築の希求」であり、バリケード内部での「真の解放感」「エロスの結合」「人間臭い連帯感」「直接民主主義的結合」を通じた「青春と「学問」の邂逅」である。
- ③封鎖学生を「政治技術的」に孤立させ、教員としての「自己を破棄」して、彼らを「学生と呼ぶことをやめ、狂信的暴徒、破壊者集団、われらの敵と宣告し、国家権力の手に委譲すること」は、我々にとって「汚辱にまみれた闇黒の行為」にほかならない。
- ④しかし、封鎖学生が「自己の目的理念と暴力手段の緊張関係を見失い、みずからの頹廢と独善に対する鋭敏なクリティークを忘れて驕慢な闘争至上主義に転化し、仮借なき功利主義、方向性なき暴力の美化と事後正当化に走り、一切から免責された叛乱者として無条件的破壊を高唱するなら、われわれもまた、かれらとの対応は断念し、勇気ある訣別を告げた上で、一切の功罪を歴史の裁断に委ねざるを得なくなる」。
- ⑤「封鎖暴力が、正当かつ絶対に他のいかなる手段より優越していたし、現に優越していることを、瞬時もやまず立証しつづける責任を、かれらは全北大の構成員、日本の全民衆によっていま問われており、かつそれから免れてあることはできない」。
- ⑥現在求められているのは「事態打開の方策」ではなく、「謙虚にわがこととしてかれらの問題提起を、われわれのことばで、われわれの思想に血肉化すること」であり、「対峙しあう批判的緊張関係の無数の渦」こそが必要である。

学生の問題提起を真摯に受け止め、なんとか解決の方向を探ろうとする姿にも見えるが、所詮出口無き議論であり、議論し続けることに価値を見出す、いわば〈思考ゲーム〉の表白だったのであるまいか。「人間主体、思想意識の変革なき制度上の近代化・合理化は、どこへ行くのであろう。いっそうの科学技術文明的価値観のモノポリー的支配、それによる人間疎外と抑圧の秩序をさらに精密に拡大しないという保証が、どこにあるのだろうか。」「擾乱の歳月は、やがて沈静するかも知れぬ。現在を、冷然としておのれの学問世界に籠るものは、あるいは美事な強者であるだろう。」

が、われわれは不幸にして超然たりえぬ者たちの連帯を結ぶのである。」このような言説に接する時、〈根源的な問題〉に身を隠し、事態の推移を悲観し、敗北主義に酔う、ある意味できわめて大学教員らしい姿が見えてくる。たとえ想像を絶する過酷な状況下に置かれていたとしても。その意味では、次のような学生への「敗北宣言」の方が潔い。<sup>(197)</sup>

北大では、今、諸君の正しさによって、人間性までふみにじられ、僕たちは深いきずをうけて、もっと具体的に言えば虚無しか展望しえず、あるいは、日頃大学当局に対する不満、うらみが、諸君の正しさによって陰湿に満足せしめられるのみで、諸君と共に闘いたいと願う芽のようなものまでむしりとられつつ〔中略〕たおれているのである。諸君の正しさはそのような質の正しさなのです。

さらに9月4日には教員有志10名が250名の署名を携えて、「いかなる少数派とも理性的討論を拒まぬ姿勢を明確」にするため、封鎖学生らとの討論集会開催に関する「学長への要請」を行った。<sup>(198)</sup>堀内学長は封鎖学生らが「非理性的行動」を取りやめるのが先決だと答えた。この要請に対して、教育学部院生協議会が即座に「圧倒的多数の学生、教職員、院生は全く登場してこない」討論会の無意味さを指摘し、教員有志の「低劣な思想性」の「自己否定」を求めた。<sup>(199)</sup>事態の深刻化に直面して、教員とか学生とかいった立場を超えて、思想闘争ともいうべき議論の地平が切り開かれていた点に注目したい。

事態を外在的ではなく、内在的に掴まえようとする教員もいた。戦後北大「革新」史のなかでとらえ直そうとする発言である。<sup>(200)</sup>

状況への強いられた追従は、いま切断されなければならない。そのためには圧力集団から変革集団に転質せよ、と呼びかける声が『総括』の中から聞きとれる。この転質とはいったいどのようなことなのか。一しばしば、北大闘争は東大・日大闘争に較べて質がおちる、と言われる。『総括』もその批判を受け入れた文脈で書かれているふしがある。しかし私は、そうは思わない。質がおちるのではなくて、異質である、と思う。それは、北大の先輩たちが苦勞と工夫を重ね、積みあげてきた革新の諸成果、これを「水」にたとえるなら、その水の中を北大闘争という魚が泳いでいる有様である。しかし、『総括』では、この水への留意が残念ながらあいまいである。そのうちに水は涸れ、魚が死んでしまいはしないか。変革集団への転質とは、この「水」に留意することであり、東大・日大闘争をお手本に質を「深める」ということではない。そのような深め方によっては、北大闘争の外在性がますます露呈するばかりであろう。〔…〕「水」に留意するとは、あの転質への意欲をあくまで北大状況の中で客観的に機能させることである。

ここでは戦後北大における「革新の諸成果」、「北大状況」を絶やさぬことが「北大闘争」の永続化、「転質」にとって必要であり、東大・日大闘争との「異質」化のカギであることが示唆されている。しかし、現実的には「水」の中から「魚」は飛び出していった。

## (2) 〈学び〉と解放大学運動

69年10月1日付の北大新聞に教員5名による座談会「「教官」から見た北大闘争」が載っている。ある教員は、「農学部を中心とする学内保守勢力」= 杉野目派（杉野目自身は理学部所属）と「理学部を中心とする革新勢力」= 堀内派の対立が基底にあり、4・14告示が封鎖学生を保守勢力の

手先と位置付け、彼らや彼らを支持する教員を「後進部分」とみなした点は「特殊北大的な北大闘争の性格」であり、「イールズ事件以後の革新的な伝統が今はむしろマイナスに作用している」のではないかと論じている。<sup>(201)</sup> またある教員はかつての学生運動が「外へ向う運動、政治運動に包括されるもの」だったのに対して、今回は「外へ向うと同時に内へ向う、自己の存在そのもの」に向う運動であり、「外へ向う眼と内へ向う眼とを特殊北大に於てどのように有機的に結合していくのか、という問題」であるが、「全然手がかりを見い出せない。その限りで、北大闘争の提起した新しい問題というものはない」と断言している。と同時に「新しくはないけれど非常に重要な問題が北大においてもあるんだ、ということがいや応なしに皆の前に明らかになった。この点に北大闘争の意義があると思う」とまとめている。

両教員は北大闘争の個別性と普遍性を指摘しているが、建設的な議論とは言えない。ある意味で開き直りである。これに対して、司会者の学生は「僕らの視点というのは学園闘争というのは一般的な政治闘争に短絡させたら敗北してゆく、やはり「学ぶ」事を抜きにしては学園闘争はない」と明確に述べている。この「学ぶ」ということは、前述したようにいかなる立場にあらうが、学生や院生の間に基本的に共有されていた願いであった。その点で自主講座や解放大学運動の意味は大きい。<sup>(202)</sup>

70年5月1・15日付北大新聞にも東大の折原浩を招いた「座談会」が掲載されている。出席者はほかに北大文学部の花田圭介・花崎皋平、同教養部の中山毅、工学部学生である。中山は、北海道は国内で「植民地的な発展過程を辿ってきた唯一の地域」だから、北大もいわば植民地大学であり、「本質的には保守的であるし、そのことによって逆に進歩的であるかのように考える自己偽瞞を可能にするような伝統」を持し、「北大の「左翼」も本質的に「保守」である、あるいは「左翼的な進歩性と保守的進歩性との区別がつかない」と見る。そのうえで、「東大に比較して北大の改革の動きというのが際立って鈍いということは、その必要性が基盤的な意味でないということだ」、「一定の改革」「若干の手直し」で充分だと指摘し、北大は「杉野目さんの時代から堀内さんの現在でも何ら変っていない文部省大学」だと論ずる。いわば69年10月の座談会からさらに開き直って、「文部省に命令されて、とかじゃなく大学内部から現在の体制の矛盾というものを体制的に改ためてゆくという、そういう性格の大学」だと北大の革新性を一蹴して、改革性を否定している。

これらの座談会と並行して生まれたのが解放大学運動である。北大新聞70年3月15日付に花田圭介は「なぜ「解放大学運動」を始めたか」を寄せている。花田は69年11月8日の機動隊導入による封鎖解除以来、花崎と話し合いを重ね、12月に解放大学運動（通称「ハナハナ大学」）を立ち上げたという。「解放大学運動（仮称）を始めるにあたって」と題された文章は次のように論じている。69年4月以来の北大闘争は「政治と学問の統一的追求」であったが、大学当局は機動隊を導入して「黙殺ないし改良」とどめ、「日常性へと逃避」した。提起された問題は高校生や浪人生にまで広がっており、「教育と学問の本質にかかわる問題」は「永続的課題」として追求されなければならない。解放大学運動は「政治闘争、学内闘争を放棄して研究室にとじこもる観念的・空想的な解放運動」ではなく、我々自身を「教育と社会総体の全面的な帝国主義的再編成と闘う主体」として鍛える運動である。「学問行為の革新」「旧秩序への批判」とは「知的趣味や好奇心におぼれること」ではなく、「反戦反安保闘争の積極的、具体的構築」と「労働者、農民、市民各戦線での自立した運動との有機的、实际的関連」の不断の追求である。<sup>(203)</sup>

70年4月26日、花田は神戸大学の「造反教員」松下昇を支援する声明を出し、松下処分は「われわれ解放大学運動に対する敵対行為でもあります」と批判した。<sup>(204)</sup>松下昇は同年10月に懲戒免職処分となる。全国の「造反教員」のネットワーク、支援体制などの解明は今後の課題だろう。

### (3) 公判闘争と教員たち

花崎皋平は北大本部封鎖事件裁判（70年2月～71年9月）で被告人の全共闘学生4名の特別弁護人となる。北大新聞71年9月1日付に花崎の「北大闘争の責任、とは一本部公判最終弁論」が載っている。論点は多岐にわたるが、冒頭で、検察官の論告が北大闘争を内在的問題に端を發しているのではなく、突如として起こった「目的無き無秩序な破壊行為そのもの」と決めつけている点を批判している。これが最も重要な点であろう。

花崎は大学闘争が「およそいっさいの指示・指令によることなく、まったく自然発生的に全国いたるところの大学に生じたものである」と指摘し、次のように展開する。

日大・東大闘争の收拾は、全国の感受性のするどいすべての青年・学生の普遍的な怒りをひきおこしたといつてよい。それは、一日大、一東大の問題ではなく、ちょうどベトナムや沖縄の問題が、われわれの切実・緊迫した問題であったとおなじく、学生であるかぎりのものにとって、本質的に、切実・緊迫した問題たりえたものであった。

日大・東大には切実な問題があったが、北大にはなかったではないかというたぐいの議論は、まさに俗論のきわみ〔中略〕日大・東大闘争でえられた本質認識のうえに立って、他の諸大学の学生（全共闘）は、大学の普遍的矛盾にたちむかっていったのである。そうした普遍的矛盾をみだすために、また個々の大学の特殊な問題から進んでゆかねばならないことは、かならずしもないのである。そして、いったん幻想のヴェールをひきははずす行動に立ちあがれば、どの大学もほとんどおなじような頹廢した実相をあらわにしたのである。

この言説の中に、北大闘争と全国学園闘争の関係性が示されている。北大闘争は〈上から〉〈外から〉ではなく、〈下から〉〈内から〉のモメントで起こったと位置付けられた。と同時に注目されるのは、やはり〈学び〉の視点である。紛争は「受験競争にしのぎをけずって入学してきた新入生が大学に抱く幻滅の根柢へ光をあてる作用をもつものであった。」被告の学生たちは「大学に入れば本当の学問ができるのだ、という希望が、入ってみれば、高校時代、受験時代の勉強と質的になんらかわらない購〔講〕義のあり方や教育のパターンのなかでたちまち色あせて、幻滅に変わる…。その矛盾の集中が教養部・教養制度であったがゆえに、北大全共闘はC闘委中心であり、問題の発端は卒業式粉碎闘争ではなく、教養部クラス反戦連合による「四月十日の入学式粉碎闘争」だったのだと指摘している。まさにそれこそが「学内諸矛盾の核心」に位置付けられた。

では「造反」教員にとって、教養部・教養制度の問題とは何だったのか。教養制度をめぐる改革の動きは六〇年代前半から起こっており、教育課程の再検討も着手されていたが、<sup>(205)</sup>「造反」教員がこれらの改革にどのように関わったのかは、明らかではない。前掲大学状況教官懇話会「現在の事態と教官の自己回復について」においても、矛盾点・改革点に関する具体的発言はない。今後の課題とせざるをえないが、ひとつの視点が北大闘争の始まりを何時に見るかということである。前述した花崎ら教員有志の9月4日付「学長への要請」が「四月十日の入学式実力阻止に始まる北大紛争」

と運動論的に認識しているのに対して、<sup>(206)</sup>教育学部院協 69.9.11『旗は焼かれても』No.12「教育学部における民主的変革の経過と今後の展望」Kは、68年11月の教育学部民主化闘争における「根底的問いかけ」にさかのぼると「制度的変革」の立場から批判している。

「造反」教員における「制度的変革」論の低調は、自治会から指摘された「反動」派との親和性<sup>(207)</sup>とも関連させ、学内政治地図の読み取りの中で考察されるべきだろう。

## ⑧……………大学民主化と大学解体論

### (1) 1970年の動向

1970年度の国立大学入試をめぐり、北大と弘前大学が最後まで中止の危機にあったが、69年末に実施が決まった。70年に入ると、事態は〈正常化〉へ向い、全共闘運動も転回を余儀なくされる。同年の動きを追ってみよう。2月14日には共産主義者同盟赤軍派の北海道集会在開催され、200名が集った。東京・大阪につぐ三番目の開催だった。<sup>(208)</sup>28日には京大の滝田修講演会が小川プロダクション北海道事務所と北大出版会の共催で開かれ、映画「パルチザン前史」が上映されている。3月30日より教養部自治会選挙が行われたが、立候補は民青系だけで、選挙は不成立に終わった。教養部学生は「一般に無関心」だったという。<sup>(209)</sup>

4月18日には反戦自衛官小西誠講演会、25日には東大折原浩講演会が開かれている。同28日の沖縄デーには、早朝、教養・工・農でバリケードストライキが実行されるが即解除された。その後クラーク会館前に、農・工・獣医の自治会、教養ベ平連・教養部スト実で構成される北大全闘委、札幌大自治会（革マル系）、東海大、藤大、北星大、札幌大、北海学園大などのベ平連、合わせて500名が集った。全闘委は革マル派だった。ヘゲモニーは革マル派が握り、参加者のほとんどが69年度入学者だったため、「今後の方針についても明確ではなく、安保闘争の質的高揚は難しい」と観察されている。<sup>(210)</sup>運動は転換期に入り、ノンセクトも党派化・革命化をセクトから突きつけられる段階を迎えた。<sup>(211)</sup>

5月3日には300名の学生によって全共闘を引き継ぐ「教養反戦連合」が結成されているが、<sup>(212)</sup>新入生の参加が少なく、全共闘運動の総括も不十分だった。しかし、前年からの運動の「沈黙」を引き裂くものとして、<sup>(213)</sup>教養反戦連合は札幌地区解放大学（後述）とともに期待されてもいた。6月15日には反戦連合・ベ平連系の集会和革マル派の集会在別途開催され、前者はその後街頭デモに移り、札幌ベ平連など2000名の統一集会在合流した。<sup>(214)</sup>21～23日にかけても大規模な集会和デモが行われた。<sup>(215)</sup>

ある新入生は構内の「一種のアナーキーなムード」を次のように描いている。<sup>(216)</sup>

構内のあちらこちらに髪を長くし、米軍払い下げのジャケットにジーン姿のグループがたむろしていた。ギターを肩にかけている奴もいれば、ヘルメットにナップザックのデモ・スタイルもいた。そのどれもが奇異ではなかった。そして背景にはふさわしく学内には建学の理想同様、朽ちつつある建物や寮が梁山泊のように点在していた。出入口付近には近くの藤女子大や天使女子短大、武蔵女子短大などの女子大生らしい女の子たちの姿があった。

その中に藤女子大に入学したばかりの中島美雪（中島みゆき）がいた。彼女は出入り口付近にとどまることなく、ギターを抱えてキャンパス内に潜り込み、紛れ歩いた。「中島みゆきの世界は七〇年代の学生運動の影響を抜きには考えられない<sup>(217)</sup>」。

## (2) 全共闘運動の総括

こうした動きと並行して全共闘運動の総括が始まる。北大新聞 70.3.15「記録と総括めいたもの」は、「今、全共闘はこの雪に埋もれた北大で、闘争は組めない状態にある。四月以来の問題は、見事に忘れさられ、大学当局の思わくどおり、「正常」な大学なのである。全共闘は、今、新しい運動の視点を求めている」と述べ、「北の果て、雪に埋もれた札幌の男北大どこへ行く！」と東大闘争をもじっている。同日付「北大闘争」も、全共闘運動の基底にベトナム反戦を置くことは「誤りとは言えないまでも本質的ではない」、全共闘運動は「多義の存在理由」を持ち、「多様な個人的意識」に基いた「自律的参加」運動であり、特質は「把握しにくく」「やはり〈反戦〉ではない」、それは「労働力商品としての自己とは何か、科学を学ぶ知識人とは何か」、すなわち「科学と人間との関係の問題」の提起であり、答えは「体制にとり込まれ自己目的化した科学を個々の場で支えている現在の自己を否定する契機を絶えず組み入れ、現実を止揚する人間的・社会的実践として科学を把握すること」であるがゆえに、全共闘運動は「学」の場としての大学を対象としたのだと論ずる。ここでも〈学び〉がキーワードだが、現状認識は「全共闘運動のポシュリ」であった。

全共闘運動の解体はいくつかの方向に進んだ。ひとつは新生の意識変化である。④-(2)で69年度新生の急進化を指摘したが、70年度新生はシニカルだった。北大新聞 70.6.1「新生生座談会」において、新生は①「何も知らない、という完全なノンポリ」、②「何かやりたいが何もできないという部分」、③「〈情況〉の過酷さにニヒル化して、何をやってもしかたがないと考える部分」に区分されている。新生の声を聴いてみよう。「現状というものを、理論的には「こわすべきだ」と考えるけれど、心情的には、ほんと「シアワセだなあ」なんて思って…。「ぼくは、一見平和的な現在の状況や雰囲気、これが壊せないとは思わない。だけど、今闘争を始めたって、その効果があるものかどうか。でも、ぶち壊せれば面白いとは思うな。」「現在は、まあ一言で言うと「淋しい」という感じだな。」「ものたりない気がします。ですけど、実際に行動に踏切ることができるか、と言えば、できないんです。」

ここには変革への衝動を抱きながらも、先の展望が見えず、足踏みあるいは背を向けている姿が垣間見える。事態はまたあらたな段階へと進んでいた。

もうひとつは運動の〈窮民革命〉化である。5月に北大全共闘本部被告・北大全共闘札幌地区解放大学(D.I.C., のち共産主義労働団)が出したビラ[5/20全共闘の質・「北大解体」を継承発展させ沖縄に日本革命の根拠地を創出せよ!] Tは、次のように訴える。

自己の生活を下層化せしめよ！下層化せしめるとは、親兄弟・妻子（夫子）に嘆かれるような生活に「身を落とす」ことである。そして屈辱の日々を耐え抜き、下層人民の怨念をわがものとせよ！まず生活の安定を確保して万一にそなえ、然る後に「闘争」・「運動」を夢想するが如き二股主義を清算せよ！

ブルジョア権力打倒を口にしうる立場を獲得せよ！大学から去って下層人民に徹底して服務せ

よ！学歴なき者・学校からはじき出された者・劣等生・悪者・余計者・つまはじき者・日陰者は  
凡て沖縄・過疎地になだれ込み、根拠地創出闘争に身を投ぜよ！

さらに全共闘運動の止揚の方向性として、京大の滝田修が提唱したパルチザンへの傾斜も見られた（後述<sup>(218)</sup>）。

これらの複数のベクトルは〈超現実〉に焦点化する。北大新聞 70.12.1「北大全共闘とは何であったか [1]」は、「一つの欲情—超現実としての全共闘」と題して、「北大全共闘とは、いうなれば、バリケードに象徴され、幾つもの権力により表現を惨減され、今や札幌市内のジャズ喫茶を転々として流離らう一つの欲情である」「北大全共闘とは、僕達が夢想した大学共同体の影でもあった」と語る。北大闘争は「政治の季節」が始まった68年初めからでも3年近くが経過しようとし、運動の継続は困難になりつつあった。

全共闘からの展開ではないが、注目すべき動きとして次の二つもある。ひとつは、右派学生運動の台頭である。69年5月に東京で全国学生自治体連絡協議会（全国学協）が結成されるが、同時期に北海道学生自治体連絡協議会（道学協）北大学生協議会の存在が確認でき<sup>(219)</sup>、6月には良識学生総決起大会が開かれて<sup>(220)</sup>いる。

もうひとつは共産党・民青の〈軍事〉化である。いくつかのピラに軍事用語が見えて来る。すでに69年段階でも民青全学委員会は『若き戦士』と題するガリ版刷りの理論冊子を出していたが、70年代に入ると民青全学委員会拡大用内報の題字は「武器をとれ」（70.10.10 第3号K）であり、共産党学生委員会が機関紙拡大に向けて発したピラは「全党員への突撃アピール」（71.10.23）Kと題して、組織拡大に向けて「総突撃」を命じている。組織内部のプロパガンダといえども、闘争感性をかきたてたのではなからうか<sup>(221)</sup>。

### (3) 後退する前進？ —学生メディアの転回—

状況の変化に応じて、運動の跡付けと方向性の模索が生まれる。回顧と展望である。たとえば、70年6月10日に北海道解放大学出版会から写真集『北緯43度 荒野に火柱が』（前掲）が刊行される。69年4月から一年間にわたる闘いの様子を百数十枚の写真によって再現している。撮影集団は『写真に何が可能か』を名乗ったが、当初より運動の記録化を意図していたことがわかる。

いくつかの雑誌も出版された。ひとつは『Nein 逆光の思想』である。69年11月18日に北海道大学出版会から創刊されている。編集者は奥野路介（勝久？）で京大グループの協力を得て、創刊号には滝田修の「《開かれた空間》について」「饒舌から永続的蜂起へ」を掲載している。「全共闘運動のもつ思想的な次元における特質とは一言で表現すれば否定の営為にあると言えるだろう。それは否定的表現でしか述べることのできない論理あるいは思想の追求とその具体化の探索である」と論ずる北大助手院生共闘会議メンバーの論説（芥公介「否定者の論理」）や、小樽商大の訴え（小樽商大学生戦線「傷を深化し、更に多くの血を流せ！—商大闘争の現実的課題—」）も見える。前述したように花崎皋平の論説も転載されているが、文学部の教員による「科学の危機としての大学の危機」も見える。また来札した高橋和巳の講演「大学・戦後民主主義・文学」も注目できよう。第2号は京都大学出版会の『序章』との合同第2号として70年5月10日に出ている<sup>(222)</sup>。

もうひとつは『極北の思想』である。70年6月5日に北海道解放大学出版会が創刊している。「《楡

---

苑》解体及び《極北の思想》創刊宣言<sup>(223)</sup>にはこう見える。

親愛なる読者諸君

もうとっくにおわかりでしょう。自らの深き批判をこめて言うのなら 楽観的な、私物的な、痴呆的な あの忌しき《楡苑》を、今 心をこめて解体せねばならぬことを。そして 自らの罪深く呪われた過去を 断罪せねばならぬ時をみたのなら、新たなる開かれた表現の場への欲望を、もうおし殺すことができないでいることを。

「楡苑」とは北大を指す。創刊号には70年2月の滝田修講演「戦士の条件」が載っているの、同誌も京大との関係がうかがえる。また第3号(70.12.25)には高橋源一郎「黙否録(一)」が載っている。横浜国大グループとのつながりもあったものと思われる。このような他大との連絡関係も興味深い、第2号(70.9.5)掲載の「〈幻の全共闘〉への断想」における「全共闘運動が求めたのは、結果として表現された〈理論的成果〉云々ではなく、それに至るまでの〈プロセス〉ではなかったのか?」「〈プロセス〉の革命性」という指摘や、工学部「闘う集団」による「他者解放「論」から自己解放の「叫び」へ=科学から夢想へ」の次の一節を読むとき、前節でふれたような〈超現実〉〈夢想〉への希求を60年代的情况の〈結晶〉化として指摘できる。

我々が自らの闘争を展開しようとするのは、セクトのお墨付きなしには闘争が出来ないと言うこれまでの日本の左翼的情况の中に、権力が巧みに作り上げている日常的情况と同質のものを感じるからではないのか。即ち、こうした左翼的情况そのものが権力が作り上げている情况そのものの一部のようにさえ感じるからではないのか。セクトも権力と同様、セクトも権力として、他者として我々をコントロールする志向を持っていると感じるからこそ、我々は我々の闘争を創ろうとするのではないだろうか。このような意味で、我々にとっては、我々の闘争自身の中に解放感が存在していると言える。この意味では、闘争の結果よりも、闘争の最中がより多くの意義をもっている。

「左翼的情况」や「セクトも権力」からの離脱・自立は、「闘争自身の中に解放感が存在している」「闘争の結果よりも、闘争の最中がより多くの意義をもっている」という総括に向い、「我々」の聳立に連なるが、最終的には孤立へと沈潜した。現実的な権利獲得や自治権拡大、果ては大学民主化という「制度的変革」はほとんど意味をなさない。ベクトルはひとえに分裂・分解し、拡散状況の自覚を共有することが共同性・連帯性の確認という倒錯した関係性が、第2号編集後記から垣間見える。

〈統一〉のひとかけらもない雑誌になってしまった感じだが、これも分裂された我々の同時代のひとつの切片の姿でもあろう。我々はもはや時代を共有する、などと言ったことからどこまでも隔っている、ただ表現のみが、世界に対する表現のみが我々のさいごの共同性を信じさせてくれる

廃刊号である第4号(71.5.1)の編集後記は廃刊を「敗北」と受けとめながら、その先を、政治ではなく、市民社会における文化の問題に見い出している。

これは最も考え深い或る諸君が言うように確かに一つの敗北なのだ。しかし僕等にとってこの種の敗北は敗北に値しないだろう。僕等が〈極北の思想〉を通しての運動を放棄した、ただそれだけのことである。再び別の諸君は北海道文化の後進性をとりたてて問題にしている。しか

し文化の地域性は後進性とは同義ではないのであり、その限りにおいては〔中略〕〈極北の思想〉は文化の地域性に固執してきたつもりだ。

廃刊の辞は創刊号掲載の創刊の辞「地底回線」に舞い戻る。

何の変哲もない北国の僻隅 都から遠く隔たった厳寒の街 しかし そこに一塊の情念のたぎりがあった それは蜻蛉の如くはかない盛夏の中で 貪るように燃えていた

〈極北の思想〉を敷衍すると、北大闘争が対象化した帝国の問題に辿り着く。すなわち、帝国本体を帝国〈周辺〉からどう撃つのか、果して撃てるのか、という問題である。

## むすび —北大闘争の位置と思想—

1971年3月の学長選で堀内壽郎は13票差で理学部長丹羽貴知蔵に敗れた。学長選考基準が変更されて、第二次選挙以降は助手も一票を行使するようになったが、学長選の民主化は堀内再選につながらなかった。丹羽は前述した69年4月14日付「大学の自治についての大学人の声明」の発起人の一人でもあり、学長代行をつとめた人物である。全共関係のあるグループは、堀内体制から丹羽体制への移行は、「旧秩序＝国大協路線への単純復帰」ではなく、「幻想的にせよ「超社会的」な存在としての大学はその社会的意義を失ない、理念上の自己破壊を併発して崩壊」し、「開かれた大学」＝「社会に責任ある大学」といった市民社会の一翼としての「大学」像<sup>(225)</sup>への転換と評した。今日にまで続く大学の〈社会化〉の開始であるが、丹羽体制のもとで自治会活動家の相次ぐ逮捕事件が起こる。<sup>(226)</sup>強権的な丹羽体制は一期で終わり、後任にはかつて堀内体制を支えた法学部の今村成和が就いた。北大初の文系学長である。

全8章にわたって、ビラを中心に68年から69年の動きを描いてきた。あらためて、北大闘争とは何だったのか、そこから何が学べるかを、以下の四点に整理してみたい。

第一は、北大闘争の時期的問題、後発性についてである。北大闘争は内的必然性がないまま、日大・東大闘争に押される格好で起こったという〈外圧〉論がある。<sup>(227)</sup>たしかに北大闘争の始動期は68年後半から69年前半にかけてであり、エポックは69年4月の入学式事件である。全共闘の結成準備は69年夏であり、正式の結成は10月と遅い。全国的な動きからすると、周回遅れのイメージがある。

しかし、北大闘争が無目的にブームに流されて遅れて始まったと見るのは表層的観測だろう。60年代の新寮闘争、軍事研究反対闘争、機動隊導入問題、反基地闘争など学内外の闘いの高まりを基盤として、67年の堀内学長誕生がバネとなって、北大闘争が〈内発〉的にスタートしたものと考えられる。しかし、闘争は学内諸勢力の統一だけではなく対立を招き、全国学園闘争の渦のなかで複雑で混乱した様相を見せて行った。

第二は、北大闘争の〈内発〉性に注目するならば、北大闘争が日大・東大闘争から後知恵として戦略や戦術を学んだということを云々するのはほとんど意味がなくなるということである。大局的に眺めれば、新制発足時に全国に向けて発信した大学改革構想やイールズ闘争に象徴される学生運動の蓄積、杉野目体制下における学園闘争、堀内体制下における文部省への対決姿勢の堅持、という「革新」北大の伝統のなかで闘争を育て上げようとする思いの方が重要であっただろう。いわば

北大ナショナリズムである。

しかし、大学大衆化の波が押し寄せる中、そうした学園意識は希薄化する。全共闘系の雑誌には「文化の地域性は後進性とは同義ではない」「文化の地域性に固執してきた」という言葉が見える。闘争の後発性・後進性意識からの脱却であり、地域性とは〈内発〉性を意味しただろう。

この点から発して、第三は、帝国〈周辺〉から帝国は撃てたのかという問題である。北大闘争とはマクロ的には北海道において絶大な知的権威と権力を振るう「旧帝大」北大がいかに国家を変革するのか、あるいは国家から解放されるのか、という問題であった。そしてその射程に〈内発〉性、その最大のものを具体的にあげれば、大学闘争のテーマに先住民族アイヌの存在はあったのか、という問題がある。

なぜならば、北大にとってアイヌ問題は今なお未解決の問題だからである（アイヌ遺骨返還問<sup>(228)</sup>題）。前述の北大全共闘本部被告・北大全共闘札幌地区解放大学は「大学から去って下層人民に徹底して服務せよ！ 学歴なき者・学校からはじき出された者・劣等生・悪者・余計者・つまはじき者・日陰者は凡て沖縄・過疎地になだれ込み、根拠地創出闘争に身を投ぜよ！」と〈窮民革命〉論を訴えたが、沖縄返還闘争の中で沖縄への言及はあったものの、アイヌは見えなかった。革命論にアイヌが出てくるのは、72年9月付の共産主義労働団「再度学園闘争を！」Tである。70年代初めのアイヌ解放運動と関連がある。帝国を撃つ眼は大学の内から外へ出た。つまり、北大闘争において帝国を撃つことは出来なかったということである。〈窮民革命〉論にしても、解放大学運動にしても、あるいは「根拠地」思想<sup>(230)</sup>にしてもその後十分な展開は見られなかった。

第四は、ピラを中心とした北大闘争の描写から、従来の固定的な共産党・民青 VS. 全共闘・新左翼という図式に当てはまらない事実が多く見られることである。たとえば、革命論や暴力論であるが、もっとも印象深いのは〈自治会全共闘〉とでも呼ぶべき文学部民主化行動委員会ではなかろうか。彼らは「自己否定」を前面に打ち出して、全共闘に「自己解体」を突き付け、「自己変革」するよう求めた。彼らは「狂暴な批判精神」をもって、既存の全共闘を批判・超克しようとしたのである。

冒頭で共産党・民青系の学生運動家だった手島が全共闘への「歴史的な理解」を示し、大学闘争を経た今、「否定し合う関係でない関係、お互いを認め合う関係」をどう作っていくのかという課題を提起していることを紹介したが、当時も固定的で教条的な議論の応酬や平和共存的な認め合いにとどまらない、状況をどう止揚して具体的な否定と変革にむすびつけるか容赦ない対論がなされていたのである。新しい理解や関係性の創出のためには、そうした広い視界を抱きつつ、厳しい検証に立ち向かわなければならないだろう。

総じて北大闘争とは、戦後民主化の系譜に立つ北大民主化運動が60年代の政治情況と大学大衆化のなかで十分発展しきれず、北大が北海道社会における絶大な知的権威・権力にとどまることで、社会変革の主体として自己形成しえなかった闘争であった。今日の大学のありよう、個別北大のあり<sup>(231)</sup>ようを考えたとき、北大闘争が突き付けた問題は未解決のまま存続している。その意味では「北大問題」<sup>(232)</sup>と呼ぶことも可能である。

## 註

(1)——代表作として、小熊英二『1968（上・下）』新曜社、2009年。小熊は「大学闘争」と呼ぶが、「大学紛争」「学園紛争」を用いる研究も多い。

(2)——藤原一暢「北海道大学農学部学生運動史」『北海道大学大学文書館年報』第4号。

(3)——元北大職員による1969・1970年制作記録映画『激動の北大史』が上映された。

(4)——「北大五・一六集会報告集」編集委員会編『蒼空に梢つらねて』柏艸社。本書は2010年5月に北大で開催された対話集会「北大の自由・自治・反戦・平和の歴史を考える—イールズ闘争六〇周年・六〇年安保闘争五〇周年の年に—」の内容をまとめたものである。

(5)——山本美穂子・石垣佳奈子「〔目録〕堀内壽郎関係資料」『北海道大学大学文書館年報』第6号、2011年、参照。

(6)——北大闘争期までの戦後北大の改革の歩みについては、北大大学院生協議会討論資料編集委員会編『大学変革—その闘いの理念—戦後・北大変革の課題と展望』「大学変革」討論資料編集委員会、1969年、参照。

(7)——北海道大学編『北大百年史・部局史』ぎょうせい、1980年、463～465頁、同編『北大百年史・通説』ぎょうせい、1982年、341頁。改革案に対する学内の消極的状况については、北大新聞（『北海道大学新聞』復刻版、第三・四巻、大空社、1989年）1947年11月22日付「新制大学制度案に就て 初の全学討論会」（以下、日付は47.11.22と略記）、同49.6.20堀内壽郎「ふしぎなかべ」、参照。

(8)——前掲『北大百年史・部局史』463～464頁。

(9)——北大新聞50.10.1「赤色教員追放表面化」。

(10)——堀内の大学観・学問観は、北海道帝国大学新聞（『北海道大学新聞』復刻版、第三巻、大空社、1989年）46.12.10「大学と社会」、北大新聞49.12.6「技術以前、の問題」、同51.10.20「卑屈にして傲慢な植民地性の放逐」、同52.1.20「平和のための科学」、同59.9「驚ろく基礎研究の充実と連 応用にたくましいアメリカ」、参照。当時の堀内の身边は、その進歩的な思想性からか、厳しい環境にあった。今西一「テロルの「兇弾」—白鳥事件・高安知彦氏の手記」『ARENA2018』vol.21、2018年、に収められている元北大生高安知彦の「白鳥事件覚書—元日本共産党札幌委員会、中核自衛隊委員の手記—」は、事件前後の話として、「北大ボート部長で高名な理学部の某教授」という表現で堀内壽郎が、真夜中に大学から自

宅に帰る際、「木刀を常時携えておられたことは学内の有名なうわさだった」と記している。堀内の学長選についても記しておこう。49年の学長選で松浦とともに下馬評に上がった堀内は、選挙資格者に学生も入れるべきと発言している。50年にはイールズ闘争の責任をとって伊藤誠哉学長が辞職したため学長選が行われ、堀内は第一次投票で20票獲得している。54年の学長選第一次投票でも候補者10名中に選ばれるが、辞退している。このときの学長選は第三次投票まで戦組・民科系統一候補の大賀恵二（工学部長）がリードしたが、決選投票（第四次投票）で杉野目晴貞（理学部長）が8票差で勝った。58年の学長選で堀内は第一次投票で17票を獲得し、第二次投票に進むが、上位には食い込めなかった。北大新聞49.11.11「学長改選期日迫る」、同50.10.12「後任学長に島教授」、同54.9.15「学長改選近づく」、同54.10.21「新学長に杉野目教授」、同58.9.30「学長選挙始まる」、同58.10.25「杉野目氏再選さる」、前掲『北大百年史・通説』393～394、400頁、北海道大学百二十五年史編集室編『北大百二十五年史・通説編』北海道大学、2003年、115～116頁、参照。62年以降の学長選については本文中に記した。

(11)——大藤修『検証イールズ事件—占領下の学問の自由と大学自治—』清文堂、2010年。

(12)——前掲『北大百年史・通説』391～393頁。

(13)——前掲『蒼空に梢つらねて』所収の明神勲「イールズ闘争—研究者の立場から」23頁、中野徹三「イールズ闘争—その思い出と、今考えること」212頁、『大原社会問題研究所雑誌』第703号・2017年5月号「日本社会党・総評時代の日本共産党の労働組合運動の政策と活動について—1970～80年代の総評との関係を中心に 梁田政方氏に聞く」50～51頁。

(14)——最近の研究として、梁田政方『北大のイールズ闘争』光陽出版社、2006年、前掲『蒼空に梢つらねて』、今西一「北大・イールズ闘争から白鳥事件まで」『商学討究』第61巻第4号、2011年、同「北大・1950年代の政治と学問」『商学討究』第62巻第1号、2011年、今西一・河野民雄「白鳥事件と北大—高安知彦氏に聞く—」『商学討究』第63巻第1号、2012年、渡部富哉『白鳥事件 偽りの冤罪』同時代社、2012年、中野徹三「1950年前後の北大の学生運動」『大原社会問題研究所雑誌』第651号、2013年、梁田政方「中野徹三「北大のイールズ闘争」論に反論する」『大原社会問題研究所雑誌』第658号、2013年、後藤篤志『亡命者 白鳥警部射殺

事件の闇』筑摩書房、2013年、前掲今西「テロルの「兇弾」」2018年、がある。

(15)——島成郎監修『ブント〔共産主義者同盟〕の思想』6、北海道地方委員会編・灰とダイヤモンド、批評社、1990年、185頁。

(16)——向井承子『北大恵迪寮の男たち—60年安保から三十年—』新潮社、1991年、25頁。教養部自治会執行部は、59年から社学同系だったが、60年2月に共産党系となり、安保闘争終息期の同年10月に再び社学同系となる。

(17)——北大の学寮については、北海道大学学生寮の新設に伴う記念事業実行委員会編『北海道大学学生寮新設・閉寮記念誌』北海道大学学生部、1983年、恵迪寮については、恵迪寮寮史編纂委員会編『恵迪〔迪〕寮史』第2巻、北海道大学恵迪寮、1987年、『恵迪』百年記念号（通巻第7号）恵迪寮同窓会、2007年、参照。

(18)——1967年入学のある女子学生は入寮を希望したが、学生課では合格、寮では不合格だった。「心に刻みしこと 60年代後半の学生生活」e 檜文—北海道大学文学部同窓会・女性部 HP (<https://sites.google.com/site/eyubun/ladies/ladies03>) 閲覧日：2018.5.13。

(19)——北大寮連第16期執行委員会66.2『討論資料新寮問題』K、北大寮連第3期執行委員会・北大寮連第18期執行委員会67.1『資料No.2 新寮問題に関して—正しい解決のために—』K、同67.4『資料No.3 一真実は物語る— 北大に於ける学寮問題 危機に瀕する大学の自治に関して—正しい解決のために—』K。

(20)——67.4.24 海野正次宛堀内書簡、文：堀内F-23。

(21)——68.2.5 海野正次宛堀内書簡、文：堀内F-23。

(22)——文：堀内F-23。

(23)——北大新聞67.6.10「学長と会見 相互の信頼を基盤に」。

(24)——北大学生新聞（共産党系。以下、学生新聞と略す）68.1.31「対談 大学を語る 学長・学生部長」K。

(25)——学生新聞67.5.15 論説「学部長団の本質と現段階」K。

(26)——前掲「対談 大学を語る」。

(27)——前掲『北大百年史・通説』448頁。

(28)——北大新聞68.3.10「新入生に贈る歓迎の言葉よきステューデントたれ」。

(29)——前掲『恵迪寮史』第2巻、712頁。

(30)——読売新聞68.11.16「北大に「全学協議会」 対話の場へ学長が私案」。

(31)——前掲『北大百年史・通説』333頁。なお、北大

新聞50.4.24「全学協議会開かる」によれば、同年4月開会の全学協議会は委員長に杉野目、副委員長に堀内を選出している。

(32)——北大新聞67.12.25「学長、教学のビジョン語る」。

(33)——道新69.1.18夕刊「大学の自治そこなう 堀内壽郎北大学長の話」。

(34)——道新69.3.5「政治の貧困なくせ 堀内学長、受験生に講演」。

(35)——道新69.3.25夕刊「北大、平穩に卒業式」。

(36)——前掲『北大百年史・通説』は「安保反対運動以降、北大の学生運動は活発ではなく」（446頁）と記し、60年代の学生運動については一頁ほどしか割いていない。しかし、63年に教養部自治会はブント、マルクス主義学生同盟（マル学同）から民青系に指導権が移り、64年には北海道学生自治会連合（道学連）も再建されている。こうした基盤のうえに、前述したような新寮闘争、軍事研究反対闘争などが形成されていった。60年代半ばの動きは重要であろう。國中拓「サークル・寮・自治会—安保直後から道学連再建にかけてのころ」・鈴木徹郎「再建道学連の活動に関わって—一六〇年安保と七〇年安保の狭間で—」前掲『蒼空に梢つらねて』所収、参照。

(37)——前掲「心に刻みしこと」。

(38)——北大新聞67.11.25「教養部学生大会流れる」。

(39)——北大新聞68.2.25「三派系、百票差に迫る C選挙」。

(40)——北大新聞68.2.10「委員長は決戦投票へ 五派乱立の教養選挙」。

(41)——前掲「三派系、百票差に迫る C選挙」。この時の選挙に良識派（右派）候補も立候補している。『セクト的學生運動を排し学園の正常化を図ろう！』K。

(42)——北大新聞68.4.1「社学同系、小差で勝つ 医学部執行委員長選挙で」。

(43)——北大新聞68.6.1「第3回・自治委員会 目立つ反戦闘争への取り組みの遅れ」。

(44)——北大新聞68.6.1「低調な討論に終る 5.28にC学生集会」。

(45)——北大新聞68.10.15「C選挙 民青系、権力を維持」。

(46)——北大新聞69.1.15 論説「69北大 学園闘争に問われている質は何か」。

(47)——北大新聞68.5.1「始めてヘルメット部隊が登場 約四百五十人が闘う」。

(48)——『文学部NEWS』68.6.25「統一行動に千七百

名が参加！」K。

(49)——反戦青年委員会と革マル派との関係は興味深い。学生戦線・反帝学評は「革マル＝反戦闘争委とは、今までの北大教養の選挙や、東京における「三派」、「革マル」という全学連の分離にみられるように共同闘争委を作ることは不可能」だが、「街頭上での行動を共に闘っていく」と一定の地域共闘的關係にあった。同68.6.21 [長沼、千歳の核ミサイル基地設置粉碎の為、全道の学友は「基地闘争」に結集せよ！] K。

(50)——学生戦線68.6.21 [民青系の反トロ策動粉碎] K。

(51)——北大新聞68.10.1「長沼現地闘争を展開 労学約千名参加」。

(52)——花崎皋平については、川本隆史「連続講座 花崎皋平、を回顧する—「三人称のわたし」はひらかれたか」*Review of Asian and Pacific Studies* No.40, 成蹊大学, 2015年, 参照。

(53)——花崎皋平「「最底辺の辺境」を知る先達」『梅本克己著作集』第10巻・月報10, 三一書房, 1978年。

(54)——『ペ平連ニュース』66.6.20第10号。

(55)——『ペ平連ニュース』68.3.1第30号。

(56)——『ペ平連ニュース』67.7.1第22号。

(57)——反戦国際会議〈札幌〉集会実行委員会68.8 [八・十八反戦国際会議〈札幌〉集会へ総結集せよ！インターナショナルの旗を高々と掲げよう！] Kによれば、海外からはOLAS(ラテンアメリカ学生機構), SNCC(アメリカ・非暴力調整委員会), SDS(西ドイツ・社会学同), JCR(フランス・革命的共産主義青年)の参加が予定され、スローガンは「ベトナム革命戦争勝利！全世界の帝国主義打倒！六十九年NATO・七十年安保粉碎！十・二十一国際反戦ストを獲ち取ろう！革命的国際組織を再建強化しよう！社共の反戦カンパニアを乗り越えて革命的反戦闘争を推進しよう！」であった。

(58)——資料番号R06 2099-04

(59)——学連執行委員会68.6 [「北大六月行動実行委員会」のよびかけについて] K。

(60)——『10<sup>th</sup> 北大祭 みつめよう真実を 担おう未来を』68.5.31K。

(61)——『ペ平連ニュース』68.10.1第37号。「反戦と変革に関する国際会議」を中心にペ平連を論じた最新の論考として、平井一臣「1968年のペ平連一生成・共振・往還のなかで—」『思想』第1129号, 2018年, 参照。

(62)——北大新聞68.9.5「クラス反戦連絡会議結成さる」, 同69.4.1「クラス反戦運動の総括と展望(上)」, 同69.4.15「4・10 入学式粉碎闘争が開示したものは何

か」, 同69.5.15「北大における新たな潮流 聞け！主体性の叫び！ クラス反戦と」。

(63)——同日のことかどうか不明だが、のちに北大本部封鎖で逮捕される工藤慶一(現・札幌遠友塾自主夜間中学代表)は、68年に北大入学後ペ平連に入り、次のような場面に遭遇する。「無党派の人たちが、僕の一年上の先輩たちが、教養の一学年四〇クラスごとに、クラス反戦というのを作ったの。あるとき、デモで「クラス反戦」という旗をにゅーっと掲げたときにね、「これだ！」と思ったんですよ。「自分たちで作るんだ」って。」高田昌幸編『希望』旬報社, 2011年, 「学校の門をくぐったことのない人がいる」。引用はネット「おしゃべりな毎日 part2」(<http://press.bien-etre.site/category/27036008-2.html>) 閲覧日: 2018.5.13。工藤は69年4月にクラス反戦連合を率いて、入学式闘争を行う。

(64)——北大新聞69.2.1「一・一九北海道労学集会開催される」。

(65)——北大新聞69.2.1「北大でも東大闘争の支援デモ展開さる」。

(66)——学連執行委員会69.1.22 [政府に呼応する自治の内部破壊を許すな] K, 同69.1 [全北大人に訴える] K, 道新69.1.22「北大でも衝突 十数人けが」。

(67)——道新69.2.5「札幌 米領事館前でもむ」。

(68)——民青道委員会69.2 [2・4 沖縄のゼネスト支援・「総合労働布令」反対！ 全道青年学生総決起集会に参加しよう！] K。

(69)——北大新聞69.2.15「再度民青系権力を維持 C選挙」。

(70)——北大新聞69.3.15「薬学部 学生投票で民青全学連北大学連加盟を否決」。

(71)——以下の記述は、教育学部教授会69.3.15『北海道大学教育学部の学部運営の諸改革について』K, 前掲『北大百年史・部局史』393~397頁による。教育学部改革については、鈴木英一「北海道大学教育学部と新しい自治」『教育学研究』第36巻第4号, 1969年, 神田光啓「教育学部における「讒言・密告事件」と「全構成員自治」への民主的改革」前掲『蒼空に梢つらねて』, 参照。

(72)——1970年2月には経済学部の全学部人集会で学生に学部長リコール権を認める学部長選挙制度改革案を決定し、同年6月には薬学部で院生参加方式による学部長選挙を実施している。前掲『北大百年史・通説』114~115頁。

(73)——教育学部学生自治会・大学院生協議会・教職員

組合教育学部班 69.3.16 「政府の大学支配政策をうちやぶり大学の民主的の改革にたちあがろう」 K。

(74)——道新 69.3.29 夕刊「北大教育学部方式と大学の自治」。

(75)——道新 69.4.15 「堀内北大学長、討論集会で表明」。

(76)——69.4.6 「闘争宣言」 K。

(77)——北大新聞 69.4.15 「4・6 闘争 青年労働者、終始ジグザグデモ」。

(78)——北大新聞 69.4.15 「ブルジョア儀式 入学式粉砕に起つ」。

(79)——道新 69.4.10 夕刊「朝のハプニング 北大騒然」。

(80)——道新 69.3.3 夕刊「平穏ながら`紛争、のカゲ」, 同 69.3.25 夕刊「北大、平穏に卒業式」。

(81)——北大新聞 69.6.1 「爆発した北大闘争(1) 北大闘争の第一歩 4・10 入学式粉砕闘争」。

(82)——北大新聞 70.3.15 「記録と総括めいたもの」。

(83)——教養部自治会執行委員会 69.4.11 「暴力学生糾弾全北大人集会に参加しよう！」 K。

(84)——教職員組合中央執行委員会 69.4.11 「一部学生の暴力による入学式妨害をきびしく糾弾する!!」 T。

(85)——前掲『北大百年史・通説』1180頁。当時西ドイツでも暴力的な学生運動が「左翼ファシズム」と批判されていた。井関正久「西ドイツにおける抗議運動と暴力—「68年運動」と左翼テロリズムとの関係を中心に」『日本比較政治学会年報 テロは政治をいかに変えたか—比較政治学的考察』第9号, 2007年, 同「ドイツの「1968年」を振り返る—50年後の視点からこの時代をどう捉えるか—」『思想』第1129号, 2018年, 参照。

(86)——前掲『北大百年史・通説』1181頁。

(87)——前掲『北大百年史・通説』1181頁。

(88)——道新 69.4.28 夕刊「北大で暁の乱闘」。

(89)——道新 69.4.29 「`自治の破壊防げた。」。

(90)——クラス反戦連合 69.4.15 「学長声明を弾劾する！」 K も同様。

(91)——北大新聞 69.5.1 「「生きる」? 何もないな(新生生座談会)」。浪人運動については時期的に一年のズレがあるが、前掲『極北の思想』創刊号「'69~'70 浪人運動総括私案」 「情況論風あるいは崩壊の中の陥穽」参照。前者によれば浪人部隊は北大闘争「最強、最大の外人部隊」だったという。北大闘争における浪人の参加については、前掲今野「「大学紛争」にかかわって」『蒼空に梢つらねて』所収も証言している(110頁)。

(92)——北大新聞 69.5.15 「北大における新たな潮流 聞け! 主体性の叫び! 自己解放への追求—道浪連とは

何か—」。

(93)——第11回北大祭全学実行委員会, 69.4.16K。

(94)——なお、1969年と1970年の北大祭にはベ平連と民青同盟が参加している。『11<sup>th</sup> 北大祭 迫りくる反動の嵐に抗し 青年よたぎる情熱を捧げん 北大の民主的変革と日本の真の独立をめざして—学問・文化の追及のなかで—』69.5.31K, 『12<sup>th</sup> 北大祭 握ろう! 歴史の舵を一静かな底流を大きな奔流へ—』70.5.31K。

(95)——北大新聞 69.4.15 「クラス反戦運動の総括と展望(中)」。

(96)——公判闘争記録刊行委員会編『11・8裁判闘争記録Ⅱ 本部決死隊公判冒頭陳述集』公判闘争記録刊行委員会, 1971年, T, 10頁。

(97)——教養クラス反戦連合 69.4 「4・26 国際反戦4・28 沖縄連続闘争に結集せよ!」 K。

(98)——北大新聞 69.5.15 論説「一切の幻想を捨てさらなる闘いの高揚を」。

(99)——反帝学評 69.4.30 「五・二全学団交にクラス・学科決議をもって総結集し、大衆的全共闘運動を構築せよ! 怒涛の進撃を!」 K, 同 69.5.2 「ファッショ的戒厳令を自立した学生の団結=各クラス行動委運動をもって粉砕しつくし大衆的「全共闘」を下から構築せよ」 T, 同 69 「社会闘争と政治闘争の統一展開を克ち取れ! —北大全共闘結成に向けて」 T。

(100)——『祖国と学問のために 北海道版』69.5.28 道学連執行委員会「高まる全学連への期待」 K。

(101)——『祖国と学問のために 北海道版』69.5.28 「革マル本部封鎖」 K。

(102)——五派連合系12団体(Cクラス反戦連合, 法学部・理学部・経済学部闘争委員会, 文学部・農学部・教養部・教育学部反戦(準), 工学部共闘委員会, 医学部自治評議会, 北大反帝学評, 北大学生戦線)連名ビラ「狂気の二十時間 日共=民青反革命暴力に北大闘争の飛躍による鉄槌を!」前掲『恵迪〔迪〕寮史』第2巻, 747頁。

(103)——C15クラス闘争委員会連名ビラ「労働者, 市民, 学生諸君への闘う学生からのアピール」前掲『恵迪〔迪〕寮史』第2巻, 747~748頁。

(104)——民青全学委員会 69.5.28 「七〇年の歴史的な人民の闘いの昂揚を前にして北大全学の闘う学友諸君に訴える」 K。

(105)——民青文学部班 69.6 「封鎖解除は我々に何をもたらしたか」 K。

(106)——封鎖解除実現教養実行委員会・封鎖解除実現教養行動隊 69.6.2 「闘争宣言」 K。

(107)——教育学部大学院生協議会 69.6.9 [本部封鎖解除の意義と暴力学生集団の本質] K。経済学部学生運動理論研究会は同月に正当防衛権を理論化している。『本部封鎖→全学バリケードと正当防衛権』K。全共闘にはゲバ棒、鉄パイプのみならず、大鎌を持ったものもいた。写真集『北緯 43 度 荒野に火柱が』北海道解放大学出版会、1970 年。

(108)——文学部自治会執行委員会 [4 月 28 日の反全学連諸派の封鎖、事前阻止をめぐる我々の立場 No.1] K。

(109)——『自治会ニュース』69.1.21 [「社学同らまたも寮内で集団ランチ!!」] K。

(110)——革マル派北大支部機関紙『プロレタリー』69.10.1 特別号 K は特集「小ブルジョア・ラジカリズム運動の「思想的拠点」と発生の社会的背景」を組み、小ブルジョア急進主義批判を展開している。院協に結集する院生グループも「一部学生に見られる小ブル急進主義とドイツ型ファシズム台頭の思想的基盤との類似」(「大学変革を支える思想の会」69 第 2 号 K) を指摘している。

(111)——理学部助手院生共闘会議 69.6 [6.2 青空討論集会 闘いへの招待] K。

(112)——学生ベ平連・青医連・助手院生共闘会議 69.6 [中教審答申・大学立法粉碎全国学園闘争勝利] T。

(113)——教養ベ平連 69.6 [C べに結集せよ] T。

(114)——C べ平連 69.9.10 [7 月の教養ベ平連による自主講座運動の総括と展望 (その II)] K。前掲『恵迪 [迪] 寮史』第 2 巻によれば若干異なる。

(115)——前掲『11・8 裁判闘争記録 II』28～29 頁。

(116)——前掲『北緯 43 度 荒野に火柱が』。

(117)——革マル派は引続き、五派連合＝小ブル急進主義批判をしている。教養反戦闘争委・教育学内闘争実行委 69.6 [6-11 学生大会議案] K。

(118)——北大新聞 69.6.15 [「民青執行部を罷免」]。

(119)——文学部自治会執行委員会 69.4 [大学弾圧立法を全民主勢力と共に粉碎しよう!!] K, 同 69.5 [「大管法」上程今月中旬→長期スト体制を] K。

(120)——文学部自治会執行委員会 69.7 [21 日学生大会→23 日学生ゼネスト 「特別立法」阻止の臨戦体制へ突入せよ!] K。

(121)——文学部自治会執行委員会 69.6.26 [7・1～5 連続ストを執行し、夏休みを返上した「大学立法」絶対粉碎の決意と闘争体制を固めよ!] K, 同 [夏休みの闘争体制を準備せよ!] K。

(122)——北海道大学工学部建築工学科 69.6.17 [声明] K。

(123)——一万人集会実行委幹事団体理学部自治会 69.6.24 [6・23 一万人集会闘争報告] K。全北大人集会は前年 68 年 6 月 22 日にも「安保反対・米軍基地撤去・ベトナム侵略糾弾・ナイキ道内持込み粉碎・大学自治擁護」をスローガンに開催されている。文学部学生自治会 68.6.17 [六・二二全北大人集会支持よびかけ] K。

(124)——道新 69.7.27 [「腹背の敵。と戦う 集会で強気のあいさつ 堀内北大学長」]。

(125)——北大新聞 69.7.1 [「駅前集会なる」]。

(126)——北大新聞 69.7.1 [「教養闘争委結成へ」]。

(127)——北大新聞 69.7.1 [「教養部をバリケード封鎖 社学同、単独で決行」]。

(128)——医学部管理棟封鎖の一週間前、青医連北大支部は「三項目要求に始る北大闘争が、法文系封鎖によって一定の限度に来ている今、医学部六項目闘争を戦う側から、全学への問題提起」をするとして青医連パンフ No.3 [「大学院完廃＝講座解体に向けて、闘うすべての学生、院生、教官へのアピール」] K を出している。六項目とは、北大医学部学生闘争会議(医学闘)と青医連北大支部が掲げた、①博士号授与を凍結せよ、②礼金・特診の事実を公表し、自己批判せよ、③診療謝礼金を返上せよ、④報告医制指定病院を返上せよ、⑤学会専門医制反対の姿勢を明らかにせよ、⑥青医連を永続的に公認せよ、である(北大新聞 69.9.1 [「博士号授与凍結を要求 医学部闘争宣言」])。これらは個別北大に限らぬ全国の若手医師・医学生の要求であった。③は 68 年 3 月に厚生省が臨床研究生制度を発足させ、当時問題化していた無給医に診療協力謝礼金を支給したことに関する要求で、青医連は受け取りを拒否していた。④は低賃金と不安定身分を強要するインターン制を引き継いだ「登録医制」に関する要求で、登録医の研修病院を医学部長や大学病院長が指定することは医学部当局の権限強化につながると批判した。68 年春には臨床研修を行った者を病院長が厚生大臣に報告する「報告医制」となる。⑤の専門医は認定医とも呼ばれたが、位置付けが不明なまま医師・医療の階層化と医局・大病院中心主義が促進すると批判した。医療改革の壁は医局であった。阿部あかねは④について、「インターン闘争の矛先は、インターン制を規定する国や厚生省ではなく、大学医局へ向かった。大学医局との対立の明確化は、その後の大学医局解体闘争につながってゆく」と述べている(博士論文「精神医療改革運動期の看護者の動向」立命館大学大学院先端総合学術研究科、2015 年)。青医連パンフ No.3 によれば、医学闘と青医連はさらに大学院廃止闘争を展

望し、医学部闘争と全学闘争の結合を次のようにめざしていた。「曾って我々が経済・教育・身分の要求をかかげてインターン改善闘争に入った時、その当然な要求がいつまでたっても満たされず、闘争の日毎の戦闘化の中で獲得した運動の論理とは何んであったか。それは私達が単に被害者としてあるのではなく、資本制社会の中で安価で不可欠な労働力として存在しており、そのことは逆に日本の矛盾した医療を自ら支える役割をはたしている」と云うことであった。このあまりにも当り前の論理は私達を引き摺って、「封建的医局の民主化」なるスローガンを降ろさせ、自らが日本医療の矛盾した荷い手としてある医局の解体を展望し、その過程で講座制の問題に突き当たり、医療の帝国主義的再編阻止と共に大学の帝国主義的再編阻止を私達の戦略に掲げなければならない地点にまで至った。我々が、開業医制と結びつき若年医師の四年ないし六年にわたる労働収奪と管理として博士号制、大学院制、医局講座制を把えるとき、それは特殊に医学部だけの問題でなく、全学部の若年研究者（大学院生、薄給助手）が講座制の中に組み敷かれ労働収奪されているという事実をもまた引き出すのだ。」青医連・医学部学生の動きについては、青医連中央書記局編『日本の大学革命6 青医連運動』日本評論社、1969年、中島進「北大医学部における六〇年安保闘争・インターン運動などの取り組み」前掲『蒼空に梢つらねて』所収、参照。

(129)——北大新聞 69.8.15 論説「北大闘争の今日的課題とは」。

(130)——『戦旗』69.8.8 第189号「札幌 大学立法粉碎で市中武装デモ貫徹」。

(131)——道新 69.8.31「北大で教官・学生討論集会」。

(132)——全共闘(C)・C 闘委 69.9 [討論への誘い 9・10 対教官討論集会 9・12 全教養生討論集会] K。

(133)——前掲『11・8 裁判闘争記録Ⅱ』30頁。

(134)——水谷宏編『全国全共闘 幻想共同体の否定』亜紀書房、1969年、「北の砦＝北大バリケードより全国の闘う学友へ」。

(135)——革マル派北大支部 69.8.18 [北大全共闘結成に関する公開質問状] K。

(136)——北大新聞 69.10.15「全共闘結成さる」。

(137)——道新 69.10.17「機動隊と徹底抗戦 北大全共闘が記者会見」。

(138)——安保粉碎北大闘争勝利全学闘争会議 69.10 [結成宣言にかえて 10・21 首都の闘いに総結集せよ！] K。

(139)——北大同盟委員会 68 [三派・革マル＝トロツキストの正体は何か?] K, 北大全学委員会 69 [現代トロ

ツキズム] K, 北大全学委員会『若き戦士』69 Vol.1 No.5 [暴露された反共暴力集団と権力の癒着……その実体] K, 北大文学部班 69.6.13 [トロツキスト＝現代日本型ファシストの本質を見抜け!!] K, 北大農学部班 69.10 [佐藤訪米、トロツキストと日本の真の独立民主主義平和] K など。

(140)——谷口孝男「社会的生活過程論の学的構想 中野徹三小論」『クリティーク』第2号(青弓社)1986年、45～46頁。のち同『意識の哲学』批評社、1987年、所収。

(141)——民青文学部班 69.10 [強固な統一戦線を結成し70年代を前に佐藤自民党政府を打倒し70年を『新しい人民による民主主義革命』の突破口へ] K。

(142)——北大全学委員会 69.5 [聴聞会の無効で長沼ミサイル＝核安保への野望を粉碎す!] K。

(143)——教養自治委員会議長団・新入生歓迎全学実行委員会 70.4『解き放たれた君のエネルギーを、歴史的70年代闘争の推進力＝人民統一戦線の構築に向けて爆発させよ!』Kにも、「この四～六月北大始まって以来の大々的な闘いを展開し札幌、北海道における統一戦線の実現のため、そのヘラルド(先駆者)たる役割を果たす決意です」と見える。

(144)——渡辺恭彦「廣松渉の思想と実践(上) 一戦後日本における学生運動の軌跡をたどって一」『文明構造論(京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野論集)』第6号、2010年、参照。

(145)——たとえば、教養反帝学評 69.6.7 [各クラス闘争委員会の再構築と結合を—6・11 学生大会に向けて—] Kは、民青の学園闘争論は「学生を小ブルジョアと規定」していると記している。

(146)——前掲経済学部学生運動理論研究会『本部封鎖→全学バリケードと正当防衛権』K。社会学同の理論については『理論戦線』第7号、1968年、「運動・組織論」参照。

(147)——文学部一学生 69.6 [あの悍しき、「暴力学生追放」の口実としか現れぬ 闘争者への一つの疑念] K。

(148)——西洋史学科共闘(準) 69.10 [自主管理宣言] T。

(149)——(教養部) 1年12組 69.5 [「未来への不安」との結合から新しい運動へ] T。

(150)——北大新聞 69.9.1。のち『Nein 逆光の思想』69.11.18 創刊号(北海道大学出版会)に「造反の覚え書き 北大・一九六九」と改題改稿のうえ転載。

(151)——北大文学部では1950年代から60年代にかけて、東洋史教授の学生差別に端を発する「藤井事件」が起り、最終的には分限免職に至った。事件は学部運営

を揺さぶり、文学部は「自治能力の欠如」を全学から指弾され、60年代から70年代にかけても、それを裏付けるような「ある種の出鱈目さ」が実在していたという。「北大文学部の歴史的事件—藤井事件—」北海道大学百二十五年史編集室編『北大百二十五年史・通説編』北海道大学、2003年、大庭幸生「文学部藤井教授事件について」前掲『蒼空に梢つらねて』所収、参照。

(152)——文学部民主化行動委員会準備会 69.5 [〈心の講座制〉打破=自己変革に支えられた根源的、全面的学部改革の巨歩を！] K。

(153)——文学部民主化行動委員会準備会 69.5 [人民に直接責任を負い、学問の自主的・民主的發展担う新しい大学創出をめざす先進的学友は文学〔部欠カ〕民主化行動委員会に結集せよ!!] K。

(154)——文学部民主化行動委員会（準）69.6 [今こそ学部変革の烽火をあげよ 自己閉塞性を打破し、全体性の地平に立て！] K。

(155)——文学部民主化行動委員会 [LDACの方向と優位（その2）文反戦への華麗な批判] K。

(156)——全学助手院生共闘会議（準）69.6.23 [6・23大学立法粉碎討論集会デモへの結集を呼びかける！] T。

(157)——平野千里「新しい歴史像をもとめて—歴史家・森山軍治郎の軌跡—」『架橋』第4号、2003年、20～21頁。森山が「殴り込み」をかけた文学部教授会は、文学部の封鎖解除の翌10月31日の会議と思われる。文学部封鎖解除の見解と文学部変革の展望] K、文院協闘争委員会 69.11.12 [文院協闘争と最近の一連の（事件）に関して] K。

(158)——北大新聞 69.5.15「理学部助手院生共闘結成」。

(159)——前掲 [6.2 青空討論集会 闘いへの招待] K。この怪しげな「北大人」意識は時に実体化する。11月8日の機動隊導入による封鎖解除の際、機動隊に追われた学生たちは歯学部前から構内に逃げ込もうとした。教職員が入れさせまいとスクラムを組んだ時、学生たちは「きさまら、それでも北大の人間か」と血相を変えたという。道新 69.11.10「荒廃の中から 苦悩する北大（中）」。

(160)——大学の危機を憂う理学部大学院生有志 69.5.6 [理学部助手・院生共闘会議準備会の反人民的・反民主主義の本質をあばく！] K。

(161)——文学部助手院生共闘・文闘委（準）69.8 [^声明、の彼方へ シニア教授会声明撤回!! 授業再開粉碎!!] K。

(162)——理工系学部共闘 69.10 [北大全共闘シリーズ

その2 続・幻想の『大学の自治』] K。

(163)——教育学部院生協議会『旗は焼かれても』69.8.24 No.3「暴力集団による封鎖に対する学内の誤った態度を批判する!!」K。

(164)——教養部自治会（前）執行委員会 69.10.30 [“泳がせ政策”の決定版=機動隊常駐を許すな！] K。

(165)——69.6.9 書簡、文：堀内 358E-23。

(166)——69.7.18 北学寮生宛書簡、文：堀内 0025F-25。

(167)——文学部反戦 69.5 [5.16 学長団交へ結集せよ！] K。

(168)——朝日新聞 69.2.4 夕刊・水田洋「自己改革としての自治」（新しい大学のビジョン）。名古屋大学教授の水田は教授・助教授・助手の身分制廃止も提起している。

(169)——道新 69.9.27「封鎖反対を決議 北大文学部の学生大会」。

(170)——北大闘争全学共闘会議（準）10・10 実行委 [10.10 闘争に総決起せよ！ 労学の力で10.21→訪米実力阻止・安保粉碎！] T。

(171)——前掲『北韓43度 荒野に火柱が』（頁数は記入されていない）。

(172)——北大新聞 69.10.15「10・11月へ総決起」。

(173)——北大新聞 69.11.1「10・21 戒厳令下の闘い」。

(174)——北大新聞 69.11.1「10・21 闘争ルポルタージュ」。

(175)——前掲「69 北大 学園闘争に問われている質は何か」。

(176)——前掲「「生きる」？ 何もないな（新入生座談会）」。

(177)——前掲「心に刻みしこと」。バリケード内の落書きに「北大闘争が青春の一ページだなんて、誰にも言わせない。だって、北大闘争は俺の青春だから」と見える。ポール・ニザン『アデン・アラビア』の一節「僕は二〇歳だった。それが人の一生でいちばん美しい年齢だなどとだれにも言わせまい」のもじりだが、こうした青春の燃焼も自然なことだっただろう。『Nein 逆光の思想』69.11.18 創刊号、30頁。

(178)——教養部自治会（前）執行委員会 69.11 [C校舎は巨大なゴミ箱になっていた！] K。

(179)——教養部闘争委員会（準）69.10 [C学生大会の圧倒的成功を機動隊導入粉碎へ！] K。

(180)——『文系連絡会議ニュース』69.10.13 No.3「文系総決起集会開かる」K。

(181)—— [封鎖解除は当然である！ 文学部封鎖解除実現実行委員会結成にあたって] K。

- (182)——「北大の事態について」, 文:堀内 102F-102。
- (183)——道新 69.10.2 夕刊「入試は必ず実施 力で封鎖解除しない」。この直後に北大ベ平連は「我々は堀内寿郎に叛逆とより強固な心の内なるバリケードでもって応えよう！」と記した学長批判ビラ [ごめんね, ジュロウー!] K を出す。
- (184)——大学状況分析三人会 69.10.31 [新局面にどう対処してゆくか!?] K。
- (185)——道新 69.10.23 「機動隊導入も 北大評議会」。
- (186)——北大新聞 69.11.15 「11・6 自民党道連を一時占拠」。
- (187)——遅くとも 1969 年 10 月中旬より出され、読了後焼却とされた秘密書類である。69.11.14『内報』第 5 号。
- (188)——北大新聞 69.11.15 「11・9 初の労農学市民共闘実現」。
- (189)——道新 69.11.11 夕刊「近日中に教養部奪還闘争へ 北大全共闘が方針」。
- (190)——北大全共闘・C 閣委 69.11 [11・13 労働者政治スト支援闘争を貫徹し街頭実力闘争を克ち取る!] K。
- (191)——北大新聞 69.12.1 「札幌・デモに終始」。
- (192)——北大新聞 69.12.15 「討論集会、開かる」。
- (193)——道新 69.1.21 夕刊「七〇年安保とわれわれ—大島渚氏と対談して」。
- (194)——北大院生協議会 69.4.28 『暴力学生集団の本質と役割—教養部教官二十八氏の声明を批判する—』K。前掲『11・8 裁判闘争記録Ⅱ』によれば、署名者数 70 数名 (15 頁)。
- (195)——前掲院協『暴力学生集団の本質と役割』。
- (196)——前掲『北大百年史・通説』1189~1190 頁。
- (197)——69.9.1 田中利光個人パンフレット『北大闘争中間総括—教養闘争委員会(準)に対する問題提起』前掲『恵廬〔迪〕寮史』第 2 巻, 775~778 頁。
- (198)——前掲『北大百年史・通説』1200~1201 頁。
- (199)——教育院協『旗は焼かれても』69.9.8 No. 11 「花崎・石坂氏らの「要請」署名の論理を批判する」K, 同 69.9.11 No. 12 「教育学部における民主的変革の経過と今後の展望」K。
- (200)——北大新聞 69.9.15 奥山次良「『All Power To the People』—『北大中間総括』を読んで—」, 前掲『恵廬〔迪〕寮史』第 2 巻, 778~780 頁。
- (201)——この発言者は (200) の奥山次良だが、彼もまた揺れ動いていた。この時期の大学教員の動揺と苦悩については、あらためて検証されるべき問題だろう。
- (202)——ある学生はこう自問自答する。「現在の僕達にとって何が「一般教養」か?」「……答えは明白である。それは授業に戻って「勉強」するのではなくて、討論(集)会、自主講座等で、自分にとって「一般教養」とは何か、どうあるべきか、まさにそれをじっくり考えもう一度捉え返してみることである」。前掲『11・8 裁判闘争記録Ⅱ』31 頁。
- (203)——文学部助手大学問題研究会 69.12.15 [今、何が問われているのか] K は、自主講座や解放大学運動を「真の自己教育者・知的生産者として自己を回復」する試みとする。
- (204)——北大新聞 70.5.1 「声明」。
- (205)——前掲『北大百年史・部局史』122~125 頁。
- (206)——のちに花崎らは始点を 68 年 4 月、クラス反戦の登場に置くが(前掲『11・8 裁判闘争記録Ⅱ』), これも運動論的認識である。
- (207)——教養部三者共闘会議(北大職組教養班・教養院生連絡会議・教養学生自治会) 69.10.26 [教養一部反動—「造反」教官による『小関教養部長不信任』策動の危険な本質を見抜き全学の団結した力で粉碎しよう] K, 教養部自治会(前)執行委員会 69.11 [急速に強まる機動隊導入の演出者学内反動と文部官僚, 「造反」教官のみにくい策動を粉碎せよ!] K, 同 69.11 [学生の無権利状態を放置したまま「教養自治」を使い, 「全共闘」を駆使する造反=反動教官の小関リコール策動粉碎!] K など。
- (208)——北大新聞 70.3.1 「赤軍派政治集会」。
- (209)——北大新聞 70.4.15 「教養部自治会選挙成立せず」。
- (210)——北大新聞 70.5.1 「札幌市内終日デモで埋る」。
- (211)——『戦旗』70.5.8 「4.28 全道集会かちとる 革マルを粉碎し, 長沼闘争へ」。
- (212)——北大新聞 70.6.1 「教養反戦連合結成さる 世界を獲得するために」。
- (213)——70.6 [6・14 長沼現地闘争・保安林伐採実力阻止の爆発で〈6 月安保〉への幻想に別れを!] T。「無名氏」のアピール。
- (214)——北大新聞 70.6.15 「長沼闘争を核として」。
- (215)——北大新聞 70.7.1 「6・23 に八千名」。
- (216)——谷口孝男「みゆき・マイ・クロニクル」大串夏身・見目誠・谷口孝男『中島みゆきの場所』青弓社, 1987 年, 119 頁。前出の谷口孝男とは別人。
- (217)——前掲谷口「みゆき・マイ・クロニクル」117 頁。
- (218)——北大新聞 70.8.1 「全共闘の彼方へ」。
- (219)——北大学生自治体連絡協議会・北大学生協議会

69 [道学協 学習会の案内] T。

(220)——北大学生自治体連絡協議会 69 [6.21 良識学生総決起大会に結集しよう 良識学生は今こそ立ち上れ!] T。

(221)——2001 年度に退職したある教員は紛争時について、「全共闘、に対抗した勢力が軍隊組織として行動していること」を回顧している。千葉誠哉「北大を去るにあたって」『北大時報』第 564 号, 2001 年 3 月。闘争における規律性・組織性が「軍隊組織」視されていたことの意味も大きいだろう。

(222)——『序章』第 1 号は『大学 叛逆への招待』69.4.21 創刊号である。『序章』は 75 年まで刊行されるが、北大関係者の論考が散見できる

(223)——バックの写真は土本典昭監督『パルチザン前史』(1969 年) の一コマである。

(224)——前掲『北大百年史・通説』462 頁。

(225)——72.11.23 [破産した堀内(元学長)と、新しく登場した丹羽(現学長)の差異は何か?] T。全共闘系学生三名による共同アピール。

(226)——佐々木忠「北大・七一年の明と七二年の暗～全国初の院生寮と農院生逮捕事件～」・山下悟「七二年北大事件」をふりかえって」前掲『蒼空に梢つらねて』所収。

(227)——たとえば、前掲『北大百二十五年史・通説編』は、「北大紛争には、他の大学のような学生と大学側と

の深刻な対立を含んだ直接の動機はなかったと言われる。[...] 北大紛争は、むしろ全国的な学生紛争の影響を受けて、大学の自治、学問の自由をめぐっての問い直し契機となってあらわれた側面が大きい」と評し(129 頁)、前掲今野「「大学紛争」にかかわって」は、「既に全国の各大学で「紛争」が勃発していたため、特に具体的な要求も目標もなく、隣がやるから俺もやる、強いて理由を挙げれば東大に後れを取るな、くらいであろうと私は思っています」と述べている(110 頁)。

(228)——アンエリス・ルアレン「遺骨は語る—アイヌ民族と人類学倫理についての考察—」河西英通・浪川健治編『グローバル化のなかの日本史像:「長期の一九世紀」を生きた地域』岩田書院, 2013 年, 参照。

(229)——榎森進『アイヌ民族の歴史』草風館, 2007 年, 第 10 章, 参照。

(230)——花崎皋平『民衆主体への転生の思想』七つ森書館, 1989 年, 「民衆の記憶のなかの「全共闘」」, 初出は 1982 年。花崎は「自己否定」論から「戦士性の徹底」と「人民性の深化」を唱えている。

(231)——神沼公三郎「国立大学法人北海道大学の本质～人を粗末にする「選択と集中の競争体」～」前掲『蒼空に梢つらねて』所収。

(232)——田中利光「言語行動に関する訓練と自省—「北大問題」の中から—」『極北の思想』創刊号, 北海道解放大学出版会, 1970 年, 参照。

付記：本論作成にあたって、北田英人氏から所蔵資料の提供を受け、当時の状況について詳しいお話を伺うことができた。山本美穂子氏には北大大学文書館所蔵の資料の閲覧・撮影に関してご高配を賜った。北大附属図書館では北海道帝国大学新聞・北海道大学新聞・北海道新聞を閲覧させていただいた。深謝申し上げます。

(広島大学大学院文学研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2018 年 5 月 20 日受付, 2018 年 10 月 1 日審査終了)

## The Positioning and Ideology of the Hokkaido University Struggle

KAWANISHI Hidemichi

The Hokkaido University Struggle occurred in the latter half of the 1960s amidst the outbreak of the post-war struggle for democracy, the anti-Vietnam War movement, the various conflicts that erupted in universities, and the frequent confrontations and skirmishes between party factions. This thesis aims to elucidate the universality, the individuality, and the distinctiveness of the Hokkaido University Struggle through an in-depth analysis focused on the copious quantities of flyers distributed on the campus and documents pertaining to the University President of that time, while tracking reports published in student newspapers, as well as the feelings expressed by students and staff members.

The Hokkaido University Struggle appeared to be behind the times, but in the post-war democratization of universities, this university played a pioneering role by presenting a nationwide reform plan of the university system in 1947. The 1950 protest against W.C. Eells involving the university is also well known. The movement for the democratization of universities is retrospectively seen as a glorious episode of “reform” even in the midst of the Hokkaido University Struggle in the late 1960s. However, in conditions similar to other universities, the anti-war movement, the autonomy of student dormitories, and military research became problematic. As an aspect of the democratization of universities and the focus on the resolution of the numerous university conflicts that had picked up speed from the mid-1950s to the mid-1960s, the office of the “University President of Reform” was instituted in 1967. After the establishment of this post, the Hokkaido University Struggle took the following three-pronged form: 1. The “University President of Reform” led the path to the democratization of universities supported by the students associations and the teachers’ union; 2. This move was opposed by the proponents of the dissolution of universities, headed by Class Anti-War Coalitions, All-Campus Joint Struggle League, and the New Left that criticized democratization and questioned the very existence of universities; 3. “Rebel” teachers were positioned to extensively reform universities from within through the university liberation movement, among other endeavors.

The Hokkaido University Struggle peaked not in 1968 but in 1969, with the actors who participated in the three above mentioned ways locked in fierce confrontations and with complex structures also being conceived within each division. Unyielding revolutionary ideas and the inclination for violence could be observed in the proponents of democratization; anti-Marxist tendencies and romanticism

---

---

became visible in the anti-war lobby; and the principles of defeatism and resignation took hold of the rebel teachers.

The Hokkaido University Struggle could not evolve fully within the political circumstances of the 1960s and the 1970s in terms of the lineage of the post-war democratization and the popularization of universities. Historically, the university as an entity was confined to the function of acting as an immense intellectual authority within the local community. Thus, it could not take the shape of an independent unit of social change.

Key words: The Hokkaido University Struggle, Democratization of Universities, University President of Reform, Class Anti-War Coalitions, All-Campus Joint Struggle League